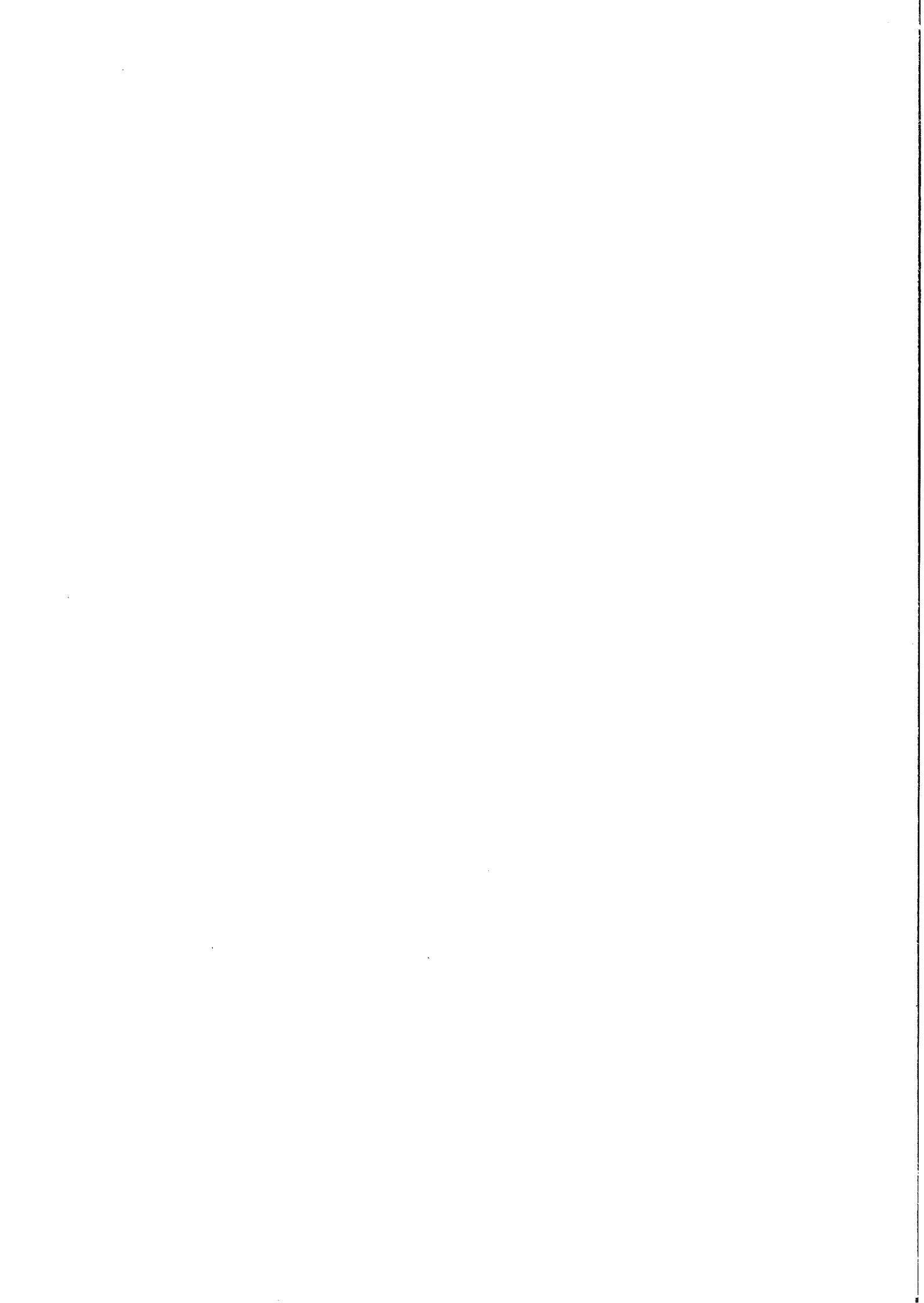


母親からみた 子どもの家事協力

調査報告書

旭化成工業株式会社
共働き家族研究所



はじめに

働く女性が増えて家計を男女共同で担う家庭が多くなってきましたが、その一方、家庭での家事や育児の分担はなかなか進まないようです。男女共同参画型社会を実現する上での問題点はどこにあるのでしょうか。

旭化成・共働き家族研究所では、こうした認識に立つて、これまでに共働き家族の様々なライフスタイルを調査してきました。昨年は「D E W K S 時代の男の鑑別法」と題して、「家事をする男」と「家事をしない男」の比較調査を行いましたが、この調査結果によると、家事をする男性は結婚前から自分ことは自分でしてきたという自立型の男性が多く、結婚後に変身する男性は非常に少ないことがわかりました。つまり、男性が家事に参加するかどうかは多分に、生まれ育った家庭環境や両親のしつけなどの影響が大きく、子どもの時から家族の一員として家事協力を経験してきたかどうかが大切なポイントとなっていました。

そこで今回の調査では、母親が子どもの家事協力や家事教育をどのように考えているか、子どもはどの程度家事に協力しているかを母親に尋ねてみました。そして子ども自身の性格や行動、母親の意識や生活スタイル、子どもを取り巻く様々な家庭環境などの分析を通して、家事をヤル子の条件を探ってみました。

調査結果によると、「家事ができることは人間にとて大切」「家事は家庭で教えた方がよい」と考える母親が大多数を占めましたが、実際に子どもにきちんと家事を教えてている家庭は1割程度でした。従って、現実に家事をヤル子も1割程度にとどまっています。家事をヤル子の条件を分析してみると、子どもに早い段階から家事を教えてきちんと分担させる、しかも夫婦が共同でこの役割を担うことが重要な要因であることがわかりました。子どもの家事参加が進まない理由としては「親が忙しすぎて、子どもに家事を教える余裕がない」「受験競争が激しいので、子どもの生活が勉強中心になりがち」の2つが挙げられており、親にも子にもゆとりのもてる社会の実現が望まれるところです。

今年は国際家族年。男女共同参画型社会の実現に向けて、子どもの家庭教育をどうすればよいかを考える資料として、この調査結果をご利用いただければ幸いです。

平成6年3月

旭化成・共働き家族研究所

目 次

■調査概要	3
■調査結果の要約	4
■調査結果	6
I. 家事協力や家事教育についての母親の意見	6
1. 子どもの家事協力についての考え方	6
2. 家事教育のあり方	8
3. 家事教育の実施状況と評価	10
II. 子どもの家事協力の状況	12
1. 家事の協力状況	12
2. 子どもの家事協力の態度	14
3. 子どもの家事の技量	15
III. ヤル子の条件	16
1. 子どもの属性からみた相違	16
2. 子どもの生活状況からみた相違	18
3. 子どもの性格・態度からみた相違	20
4. 母親の就労状況や就労意識からみた相違	21
5. 家事の実施状況からみた相違	23
6. 家事教育の状況からみた相違	24
7. 住まいや住まい方の工夫からみた相違	27
8. ヤル子の条件まとめ	28



調査概要

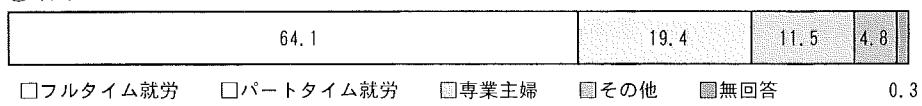
- 1. 調査名称** 母親からみた子どもの家事協力
- 2. 調査目的** 母親に子どもの家事協力や家事教育のあり方と現状を尋ね、子どもの家事協力の条件を探る資料とする。
- 3. 調査対象** 全国の小学1年生から高校3年生までの子どものいる家庭の妻
(旭化成・共働き家族研究所の機関誌「DEWKS net」読者より抽出)
- 4. 調査期間** 1993年11月10日～11月30日
- 5. 調査方法** 往復郵送法
- 6. サンプル** 1800名 (うち有効回答1113名、回収率61.8%)
サンプル家庭の対象子ども数 1734名 (男子51.0%：女子49.0%)
- 7. 回答者のプロフィール**

(1)年代別

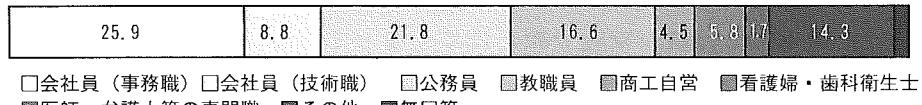


(2)就労状況

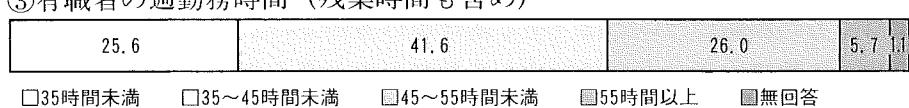
①有職・無職別



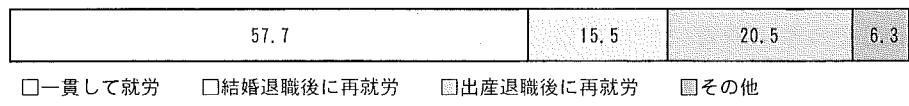
②有職者の職業



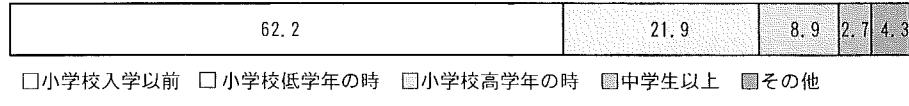
③有職者の週勤務時間（残業時間も含め）



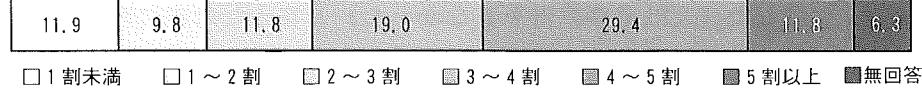
④有職者の就労経歴



⑤再就職者の再就職時の子ども（末子）の年齢



(3)世帯収入に占める妻の収入割合



(4)子どもの数



DEWKS : Double Employed With Kids の略語。「子どものいる共働き家族」の意。

調査結果の要約

I. 家事協力や家事教育についての母親の意見

1. 子どもの家事協力についての考え方

- ①家事ができることについては、母親の9割は「人間にとって大切だと思う」と答えており、「家事ができるできないは、それほど大切ではない」と答えた人は1割未満。家事の重要性を理解している母親が大多数を占めた。
- ②しかし、勉強との比較では「勉強ができることが大切」と答えた母親が5割以上を占め、「家事ができることが大切」の4割より多かった。家事の意義は認めて、子どもの将来を考えると勉強のできる子を望む親心がにじみ出ているようである。
- ③従って、子どもに期待する家事協力は「ある程度の協力」が7割弱を占め、「きちんと分担」を求める人は3割程度だった。また子どもに家事をさせることについては、父母間での意見の相違も大きく、母親の場合は男女に関わらず積極的な人が8割以上を占めたが、父親の場合は4割以上が男の子に家事をさせることに消極的だった。

2. 家事教育のあり方

- ①家事を教えることについては、「家族の一員としての自覚を持たせる」「生活能力を小さい時から養う」など、家族の親密度や子どもの自立を高める上で意義があると答えた人が7割前後を占めた。
- ②家事教育については「基本的に親が家庭で教えた方がよい」が大多数(97.8%)を占め、学校教育に依存したいと考える人はごく少数だった。しかし、学校での家庭科共修には、環境や食の安全に配慮した健康な暮らしについての教育を要望する声がかなり高いものの、裁縫や料理などの実技教育を求める人も3割程度を占め、「家事教育は家庭で」とは言っても、現実には母親が家庭で教えにくくなっている様子もうかがえた。
- ③家庭で家事教育を始める時期は「小学校入学以前から」が7割弱と非常に多く、家事教育は早いほど効果的と考える母親が圧倒的に多かった。
- ④家事協力の報酬については「全くあげない方がよい」が6割弱を占めており、家事協力は家族の連帯感や子どもの精神的な成長のためと考える人が多く、労働の一貫として金銭を与え、金銭管理を学ばせるという欧米流の考え方を支持する人は極めて少なかった。

3. 家事教育の実施状況と評価

- ①家庭での家事教育については、「きちんと教えた」と答えた母親は1割程度と少なく、「家事教育は家庭で」とは思っても、実際には十分できていない家庭が多かった。
- ②それでも家事教育はほぼ成功とみる母親が6割以上を占め、子どもの家事協力に対する期待度がさほど高くないことが、こうした自己評価となっていることをうかがわせた。
- ③家事教育成功の秘訣は「できた時にはほめたり、励ましたりする」「好奇心のある年齢の時に始める」「とりあえず何でもやらせる」の3つを支持する人が多く、まずは「先手必勝で、ほめたり励ましたりする」ことが大切と考えられている。
- ④一方、失敗した(又は家事教育をしなかった)と答えた母親に敗因を聞くと、「母親が忙しくて教えている時間がなかった」「子どもが遊ぶことが多く時間がなかった」の2つが多く、親も子も忙しい時代が家庭教育の遅れをもたらしているとみる人が多かった。
- ⑤一般的に子どもの家事参加が進まない理由としては「親が忙しすぎて、子どもに家事を教える余裕がないから」「受験競争が激しいので、子どもの生活が勉強中心になりがち」が上位を占め、多忙な親の事情と学歴主義の社会風潮にその原因を求める声が多かった。

II. 子どもの家事協力の状況

1. 家事の協力状況

①家事の実施状況についての母親の回答をもとに、子どもをヤル子、マアマア子、ヤラナイ子に分類してみると、家事20項目の中でヤル子の多い家事は、①配膳・食器運び(21.4%)、②食事の後片付け(18.5%)、③風呂の用意(17.4%)、④洗濯物をしまう(15.8%)、⑤自分のふとんの上げ下ろし(15.3%)で、比較的簡単な家事が多いにも関わらず、手伝っている子は少ないようである。

②特に炊事・洗濯・掃除など主要な家事についてはヤラナイ子が8割を占め、学年が上がってもヤル子が増えるという変化はみられなかった。年齢とともに自立型の家事をする子は増えても、家族の一員として家事を分担するという子どもは少ないようである。

2. 子どもの家事協力の態度

①家事を手伝うことに対する子どもの反応は、「渋々やっている」が最も多く34.1%。次いで「当然の役割としてやっている」「ほとんど手伝っていない」「楽しんでやっている」と続いた。家事協力に積極的な態度を示す子どもは4割弱で、6割以上は消極的な態度とみられる結果だった。学年を通した子どもの態度の変化をみると、小学校低学年の時は楽しんでやる子も多いが、小学校高学年から中学生では母親に言われて渋々やる子が増え、高校生になるとやらない子が多くなっている。「家族の一員として家事協力は当然の役割」という意識を小さい時から身につけさせることが肝心なようである。

3. 子どもの家事の技量

①家事に関わる初步的な技能をみると、よくできる子の割合は「玉子を割る」(68.2%)、「包丁を使う」(24.0%)、「アイロンをかける」(15.5%)、「ボタンつけができる」(10.6%)だった。学年が上がるとできる子の割合も増えていくが、それでも、できる子がかなり少ない技能があるのは日常的な経験不足が大きな原因ではないかと思われる。

III. ヤル子の条件

①子どもと子どもを囲む家庭環境によって、ヤル子、マアマア子、ヤラナイ子の割合がどのように変化するかを分析し、どんな条件や環境のもとならヤル子に育つかを探ってみた。ヤル子の多い条件を挙げると、①子どもがテレビを見ない(22.6%)、②きちんと家事を教える(22.4%)、③家事当番を決める(21.2%)、④子どもにもきちんと分担を求める(16.5%)、⑤夫が家事に参加する(16.0%)、⑥家事教育は小学校入学以前から始める(15.7%)、⑦家事教育には父親も参加する(15.0%)などであった。

②これらの結果からみると、ヤル子に育つポイントは、子どもに早い段階から家事を教えて分担させることであり、しかも夫婦が共同でこの役割を担うことが大切なことがわかる。逆に言えば、家事をきちんと教えて分担させている家庭が少ないことが、ヤル子が少ないという現状を生み出しているのではないかと考えられる。

③また、家事でよく使われる素材や道具を整えておき、子どもにわかりやすく使いやすい場所に置いておくなど、住まいや住まい方の工夫も子どもの家事協力を高める上で欠かせないことがわかった。

調査結果

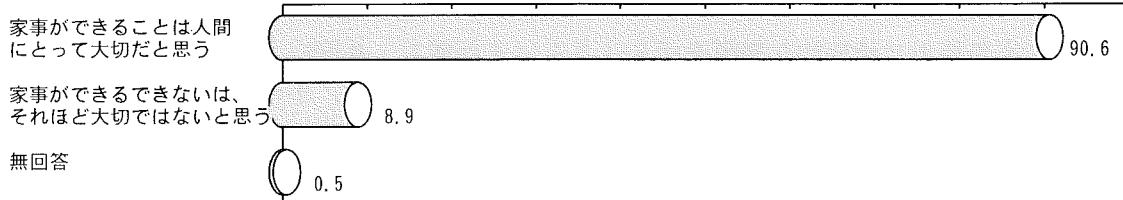
I. 家事協力や家事教育についての母親の意見

1. 子どもの家事協力についての考え方.....

(1) 9割の母親が家事の重要性を認識

まず家事ができることの意味について母親の基本的な考え方を尋ねてみた。人生において家事ができることは、「人間にとて大切だと思う」と答えた母親が90.6%。圧倒的に多数の母親が家事の重要性を認識しており、「それほど大切ではないと思う」と答えた母親は8.9%とごく少数であった。

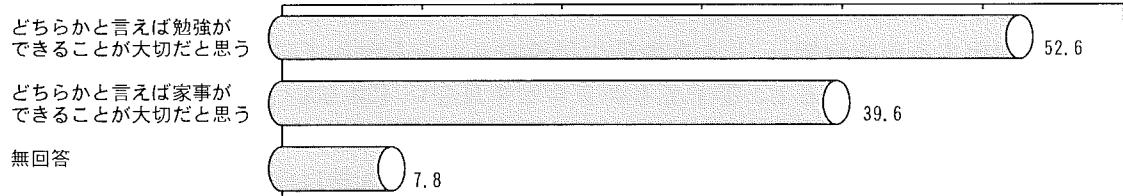
Q. 人生において家事ができることは大切だと思いますか。 (%)



(2)それでも「家事より勉強が大事」と考える母親が過半数

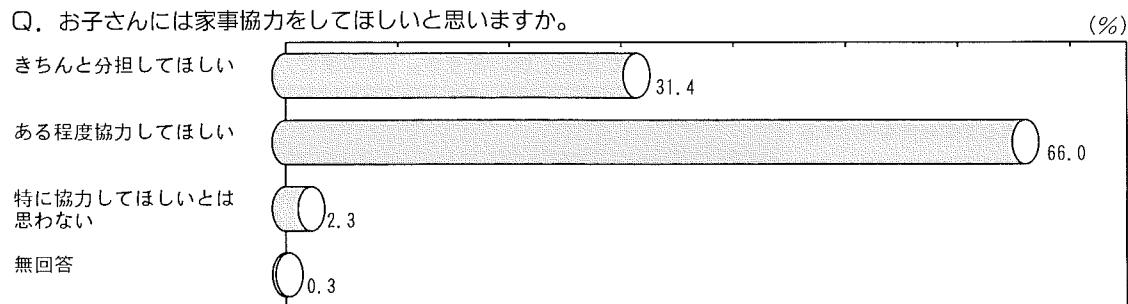
それでは、勉強と比べた時はどちらが大切と考えているであろうか。勉強と家事の優先度では、「勉強ができることが大切」と答えた母親が52.6%で、「家事ができることが大切」と答えた母親は39.6%。家事を優先させる母親が4割を占めたが、それでも家事より勉強を優先させる母親が多かった。家事の意義は認めても、子どもの将来を考えたら勉強を優先せざるをえない親心がにじみ出ているようである。

Q. 子どもにとって、家事と勉強ではどちらができることが大切だと思いますか。 (%)



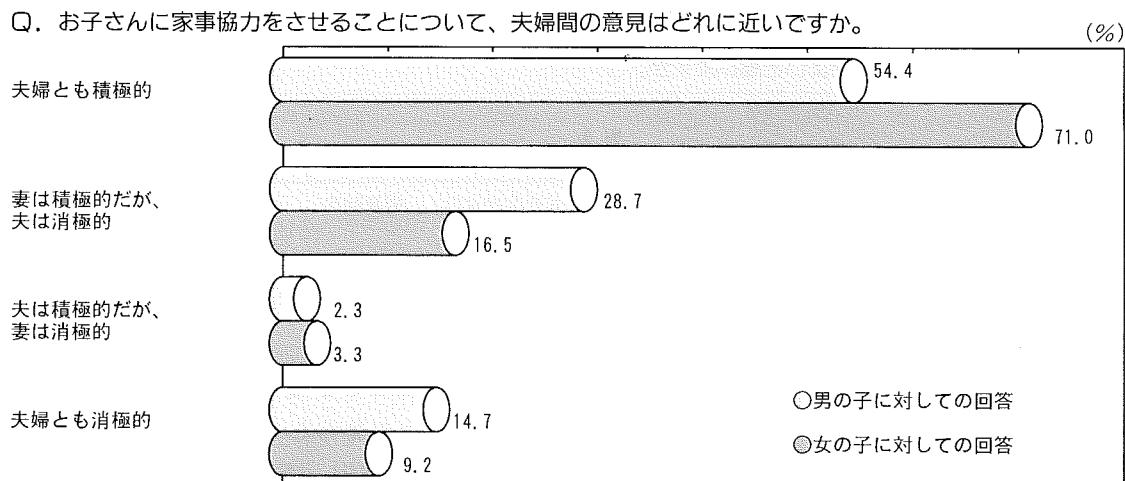
(3) 「きちんと分担」よりは「ある程度の協力」を求める母親が多数

子どもに家事協力をどの程度期待するかについては、子どもに「きちんと分担してほしい」が31.4%、「ある程度協力してほしい」が66.0%、「特に協力してほしいとは思わない」が2.3%であった。家事よりは勉強優先の母親が多いせいか、子どもにはある程度の協力を求める人が非常に多く、きちんと分担を求める母親は3割程度である。



(4) 子どもの家事協力に積極的な夫婦が過半数、しかし男の子には消極的な父親も4割

子どもに家事をさせることに対して夫婦間ではどのように考えているかを尋ねたところ、男の子に対しては「夫婦とも積極的」が54.4%と過半数を占めた。しかし、「妻は積極的だが、夫は消極的」の回答も28.7%あり、「夫婦ともに消極的」の回答14.7%を合わせると消極的な夫が4割以上になる。一方、女の子に対しては「夫婦とも積極的」が71.0%と圧倒的に多く、「妻は積極的だが、夫は消極的」16.5%、「夫婦ともに消極的」9.2%など、消極的なタイプの夫は25%程度である。2つの回答を合わせてみると、8割以上のお母さんは男女に関わりなく積極的に家事をさせたいと考えているが、お父さんの中には男の子に家事をさせることに抵抗感を持つ人がかなり多いことがわかる。



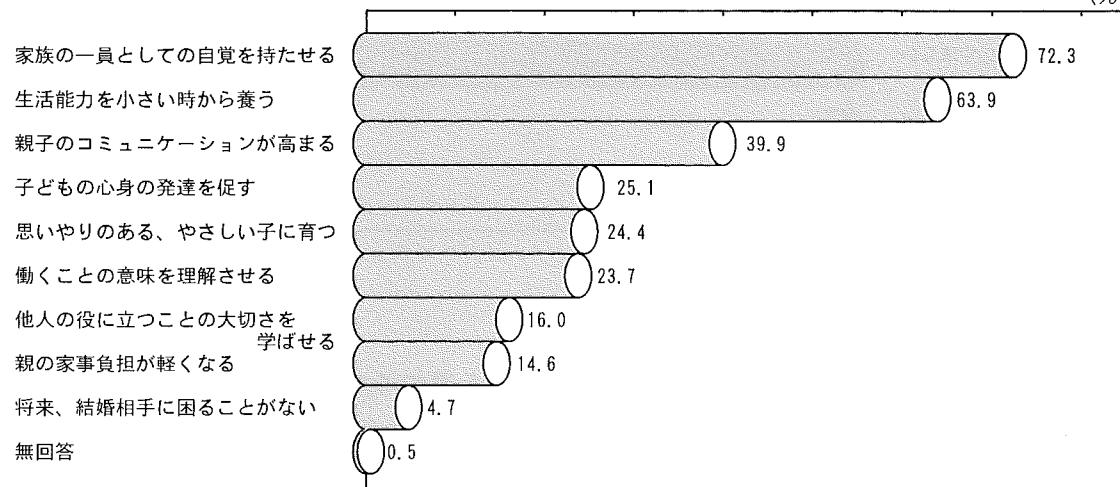
2. 家事教育のあり方.....

(1)家事の意義は、家族の一員としての自覚を持たせ、自立の能力を養う

具体的に家事の意義を尋ねたところ、上位に挙げられたものは、①「家族の一員としての自覚を持たせる」72.3%、②「生活能力を小さい時から養う」63.9%、③「親子のコミュニケーションが高まる」39.9%。家事は家族関係を円滑に運ぶうえでも、また将来の子どもの自立の面でも効果があると積極的に評価をする母親が非常に多かった。

Q. 子どもに家事を教えることには、どんな意義があると思いますか。(3つまで)

(%)

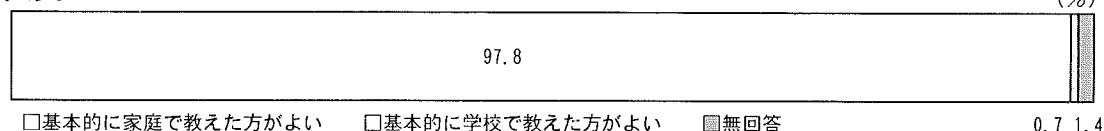


(2)「家事教育は家庭で」が圧倒的多数

家事教育をどこで実施すべきかについては、「基本的に親が家庭で教えた方がよい」が97.8%、「基本的に学校で教えた方がよい」はわずか0.7%だった。忙しいお母さんが増えたが、「家事教育は家庭で」と考える母親が大多数を占めており、学校教育に依存したいと考える人はごく少数である。

Q. 家事はどこで教えるのがよいと思いますか。

(%)

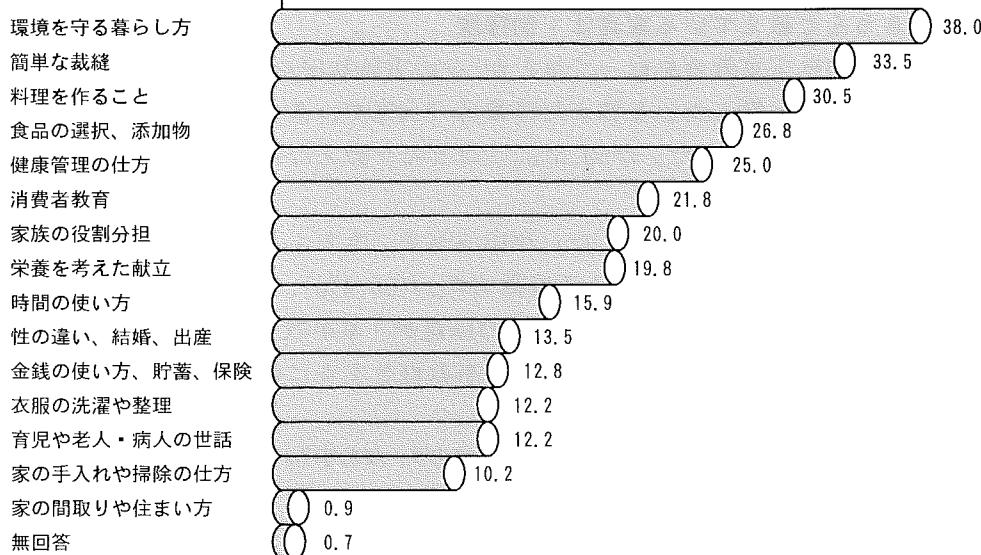


(3)学校では健康な暮らし方を教えてほしい

昨年中学校で始まった男女の家庭科共修は、今春から高校でも施行される。学校の家庭科教育で教えてほしいことを尋ねたところ、①「環境を守る暮らし方」38.0%、②「簡単な裁縫」33.5%、③「料理を作ること」30.5%、④「食品の選択、添加物」26.8%、⑤「健康管理の仕方」25.0%と続いた。総体的に、環境や食の安全に配慮した健康な暮らし方についての教育を要望する声がかなり高いが、その一方では、裁縫や料理などの実技教育を求める人も3割程度を占めており、「家事教育は家庭で」とは言っても、現実には母親が家庭で教えにくくなっている様子もうかがえる。

Q. 学校の家庭科教育で特に教えてほしいことは何ですか。(3つまで)

(%)

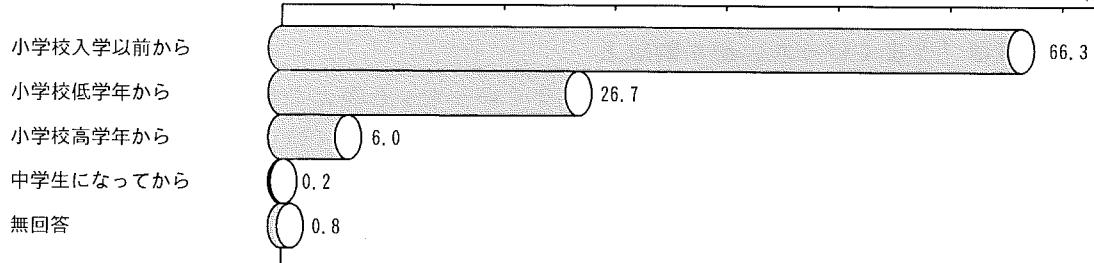


(4) 家事教育は「小学校入学以前から」が7割弱

家庭で家事教育を始める時期については、「小学校入学以前から」が66.3%と非常に多く、次いで「小学校低学年から」が26.7%だった。家事教育は早いほど効果的と考える母親が圧倒的に多いようだ。

Q. 家庭での家事教育はいつごろから始めるのがよいと思いますか。

(%)

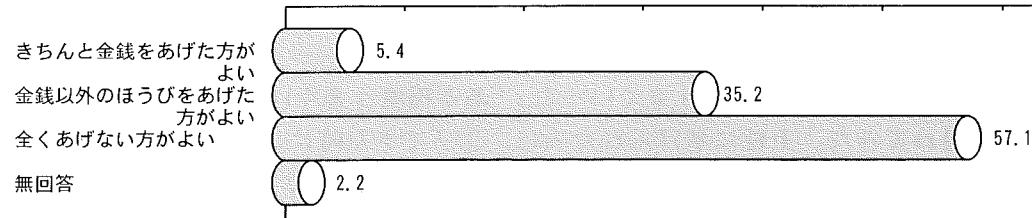


(5) 「お駄賃は全く与えない方がよい」が6割

家事協力の刺激剤として報酬を与えることについては、「全くあげない方がよい」が57.1%と過半数を占め、次いで「金銭以外のほうびをあげた方がよい」が35.2%で、「きちんと金銭をあげたほうがよい」はわずかに5.4%だった。日本の母親には、家事協力を家族の連帯感や子どもの精神的な成長を促す方法と受け止める人が多く、労働の一貫として金銭報酬を与え、金銭管理を学ばせるという欧米流の考え方を支持する人は極めて少ないようである。

Q. 子どもの家事協力に報酬をあげた方がよいと思いますか。

(%)



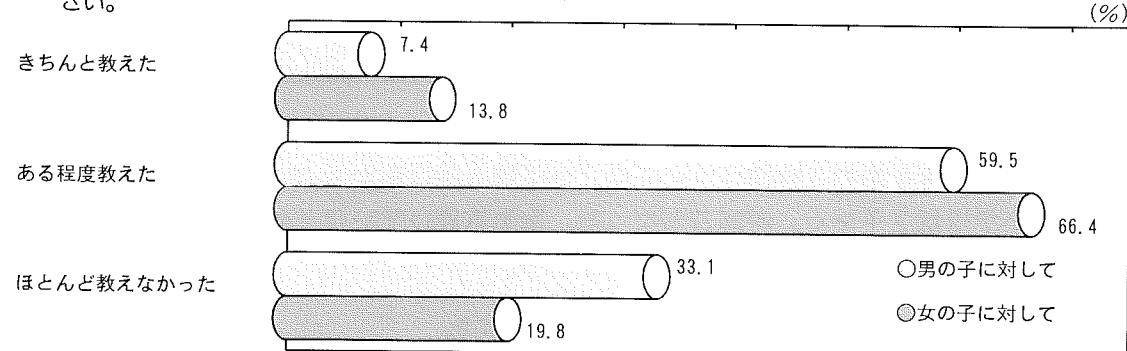
3. 家事教育の実施状況と評価.....

(1) 実際には家事をきちんと教えている家庭は1割程度

家庭では実際にどの程度家事教育を行ってきたか、その実施状況を男女別に尋ねてみた。男の子に対しては「きちんと教えた」と答えた母親は7.4%で、きちんと教育している母親は非常に少なく、「ある程度教えた」が59.5%、「ほとんど教えなかった」が33.1%を占めた。

一方、女の子に対しては「きちんと教えた」が13.8%で、きちんと教えられている子が男の子の2倍程度に達した。しかし、「ある程度教えた」(66.4%)、「ほとんど教えなかった」(19.8%)に比べるとやはり少数だった。98%の母親が「家事教育は家庭で」と答えているが、実際には男の子にも女の子にも、十分な家事教育をするには至っていないようである。

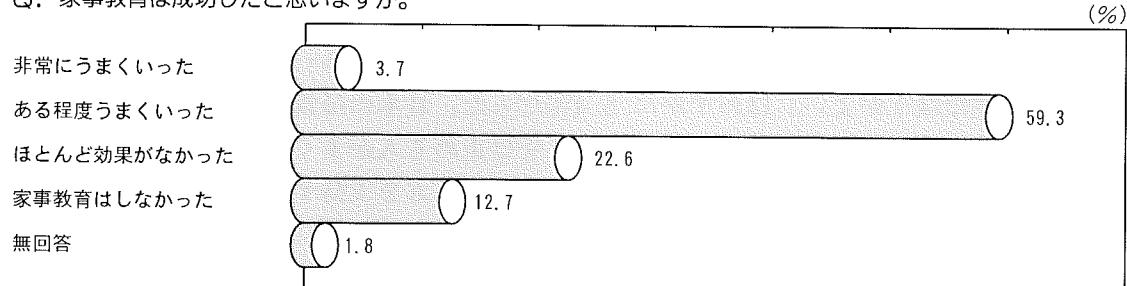
Q. これまでに家庭で家事のやり方を教えたことがありますか。男の子、女の子それぞれについて、お答え下さい。



(2) 家事教育は「うまくいった」が6割以上

家事教育の結果を尋ねたところ、「非常にうまくいった」と答えた母親は3.7%。大成功と感じている母親は極めて少数だが、「ある程度うまくいった」(59.3%)の回答を合わせると、ほぼ成功とみる母親が6割以上を占めた。しかし、後述の子どもの家事協力の実態からみると、やや甘い評価のようである。子どもに対しては「ある程度の協力」しか求めない母親が7割弱を占めており、もともと期待度が低すぎることがこうした高い評価に反映しているのではないかと思われる。

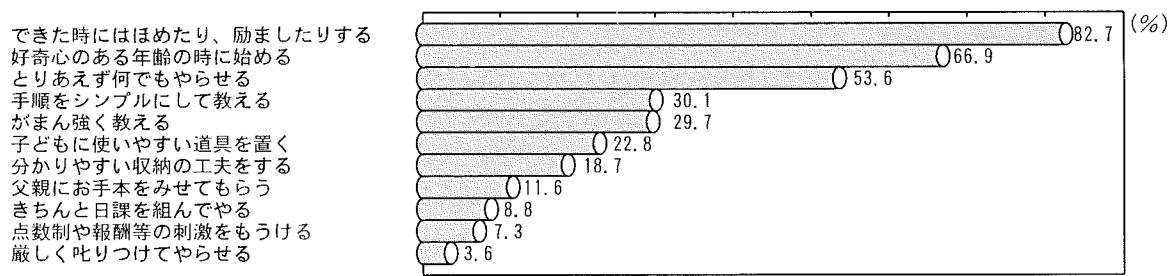
Q. 家事教育は成功したと思いますか。



(3) 成功の秘訣は「ほめて励ます」

成功したと答えた母親（「非常にうまくいった」「ある程度うまくいった」）に、家事教育成功の秘訣を尋ねてみた。上位に挙げられたのは、①「できた時にはほめたり、励ましたりする」82.7%、②「好奇心のある年齢の時に始める」66.9%、③「とりあえず何でもやらせる」53.6%だった。勝因を分析すると、早い時期から何でもやらせ、できた時にはほめたり、励ましたりすることにあるようだ。

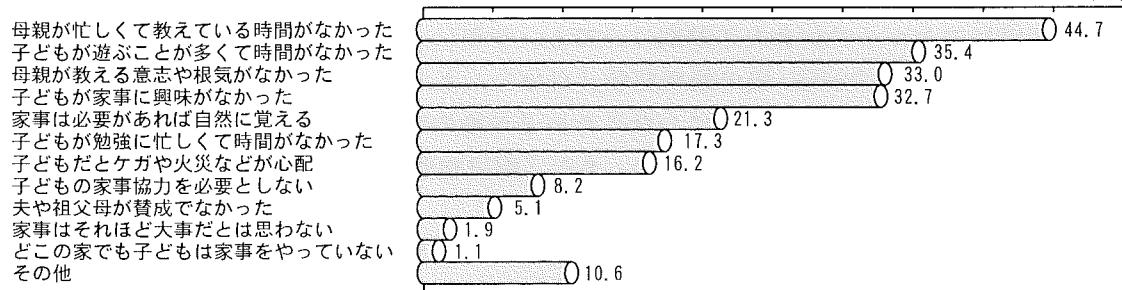
SQ. 「非常にうまくいった」「ある程度うまくいった」とお答えの方は、家事を教える上で大切なことは何ですか。
(いくつでも)



(4)失敗の原因は「親も子も仕事や遊びで忙しすぎるから」

一方、「家事教育の効果がほとんどなかった」「家事教育はしなかった」と答えた母親にその原因を尋ねた結果では、①「母親が忙しくて教えている時間がなかった」44.7%、②「子どもが遊ぶことが多く時間がなかった」35.4%、③「母親に教える意志や根気がなかった」33.0%が上位に挙げられた。敗因を分析すると、親も子も忙しい時代で時間がない、母親に教える意志がなかった、というやや自己反省的な気持ちを示した回答が多い。しかし、「家事は必要があれば自然に覚える」21.3%、「子どもだとケガや火災が心配」16.2%と家事教育に反対もしくは不必要と考える母親も一定数みられた。

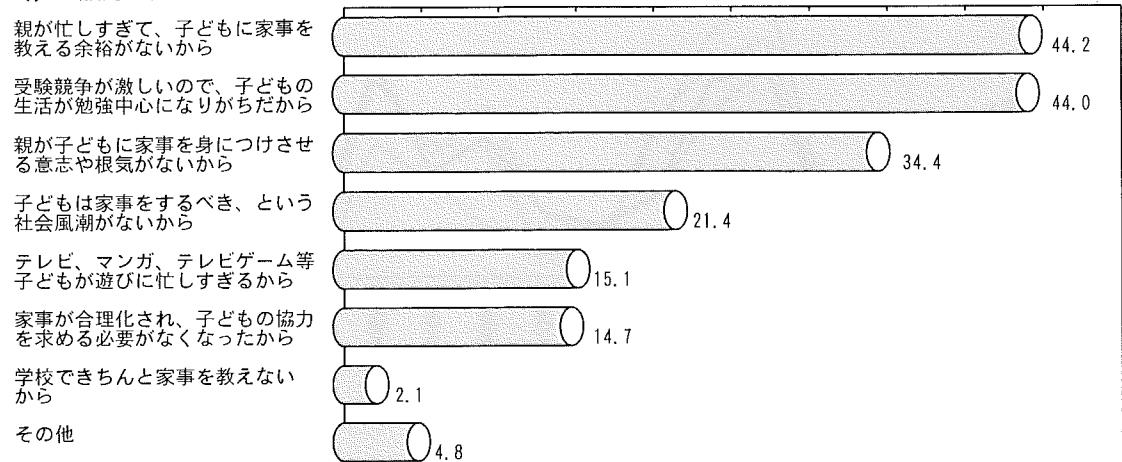
SQ. 「効果がなかった」「教えなかった」とお答えの方は、その理由は何ですか。(いくつでも) (%)



(5)家事協力が進まない理由は「親の余裕のない生活」と「受験競争」

家庭での体験とは別に、一般的に子どもの家事参加が進まない理由としては、①「親が忙しすぎて、子どもに家事を教える余裕がないから」44.2%、②「受験競争が激しいので、子どもの生活が勉強中心になりがち」44.0%、③「親が子どもに家事を身につけさせる意志や根気がないから」34.4%が上位を占めた。多忙な親の状況と学歴主義の社会風潮が上位に挙げられたが、どちらかといえば親の状況に原因を求める声が多く、子どもの家事教育は本来は家庭でしっかりと、という意見の持主が多いようである。

Q. 一般的に、子どもの家事参加が進まない理由はどこにあると思いますか。(2つまで) (%)



II. 子どもの家事協力の状況

1. 家事の協力状況

子どもの家の協力状況を母親に答えてもらった。設問は5段階で回答してもらったが、以下の説明ではすべて3段階〔「非常によくやる」+「かなりよくやる」=ヤル子、「まあまあやる」=マアマア子、「あまりやらない」+「全くやらない」=ヤラナイ子〕に分類しなおしてある。

(1) 炊事・洗濯・掃除など主要な家事をヤル子は1割以下

20項目の中で、ヤル子の多い家事を挙げると、①配膳・食器運び(21.4%)、②食事の後片付け(18.5%)、③風呂の用意(17.4%)、④洗濯物をしまう(15.8%)、⑤自分のふとんの上げ下ろし(15.3%)と続いた。子どもが協力している家事をみると、配膳・後片付けなど比較的簡単な家事や、洗濯物をしまう・自分のふとんの上げ下ろしなどの自立型の家事が多く、しかもこれらの簡単な家事でも手伝っている子どもは少数に過ぎない。

一方、ヤラナイ子の多い家事は、①洗濯物を洗う91.3%、②洗濯物を干す88.6%、③ふとん干し88.0%、④リビング等の共用部分の掃除85.7%、⑤朝食のしたく85.2%、⑥洗濯物を取り込む75%、⑦夕食のしたく74.5%と続いた。炊事・洗濯・掃除など家庭生活を中心を占める家事についてはヤラナイ子が非常に多く、特に洗濯関連の家事が目立っており、母親がやってしまう家庭が圧倒的に多いようだ。

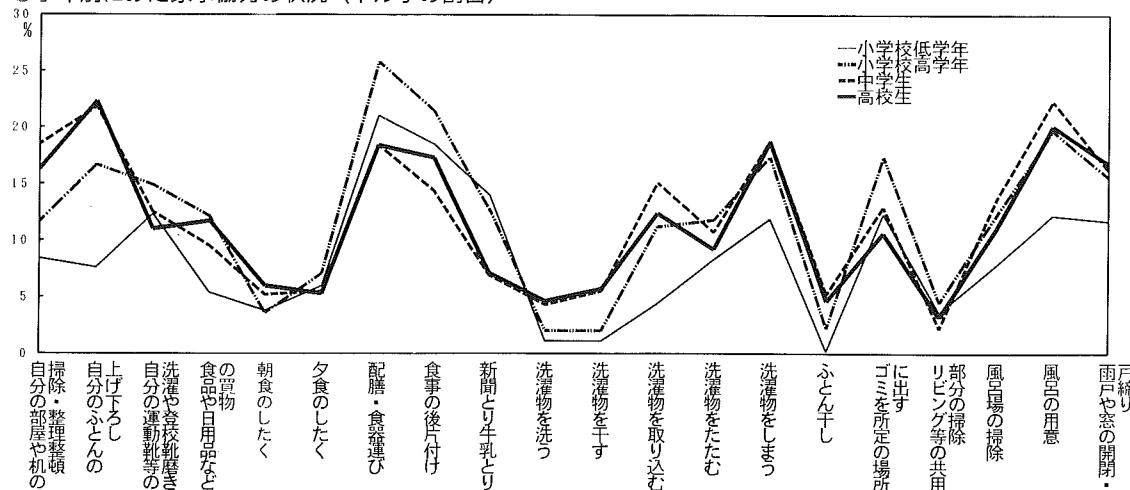
(2) 年齢とともに自立意識はやや強まるが、家族の一員としての自覚が不足

各家事項目のヤル子の割合を年齢別にみても、学年による相違はほとんどみられない。しかし、「自分の部屋の掃除・机の整理整頓」「自分のふとんの上げ下ろし」「洗濯物をしまう」など自立型の家事は学年が上がるにつれてヤル子がやや増える傾向にあり、年齢とともに自立性を高めていく子どもも少なくない。また「雨戸や窓の開閉」「風呂の用意」など不在中の家事にもこうした傾向がうかがえる。

一方、「新聞とり・牛乳とり」「ゴミを所定の場所に出す」などは年齢が高くなるとヤル子が減る傾向にある。また「朝食のしたく」「夕食のしたく」「洗濯物を洗う」「リビング等の共用部分の掃除」などの主要家事では各年齢ともヤル子が非常に少なかった。

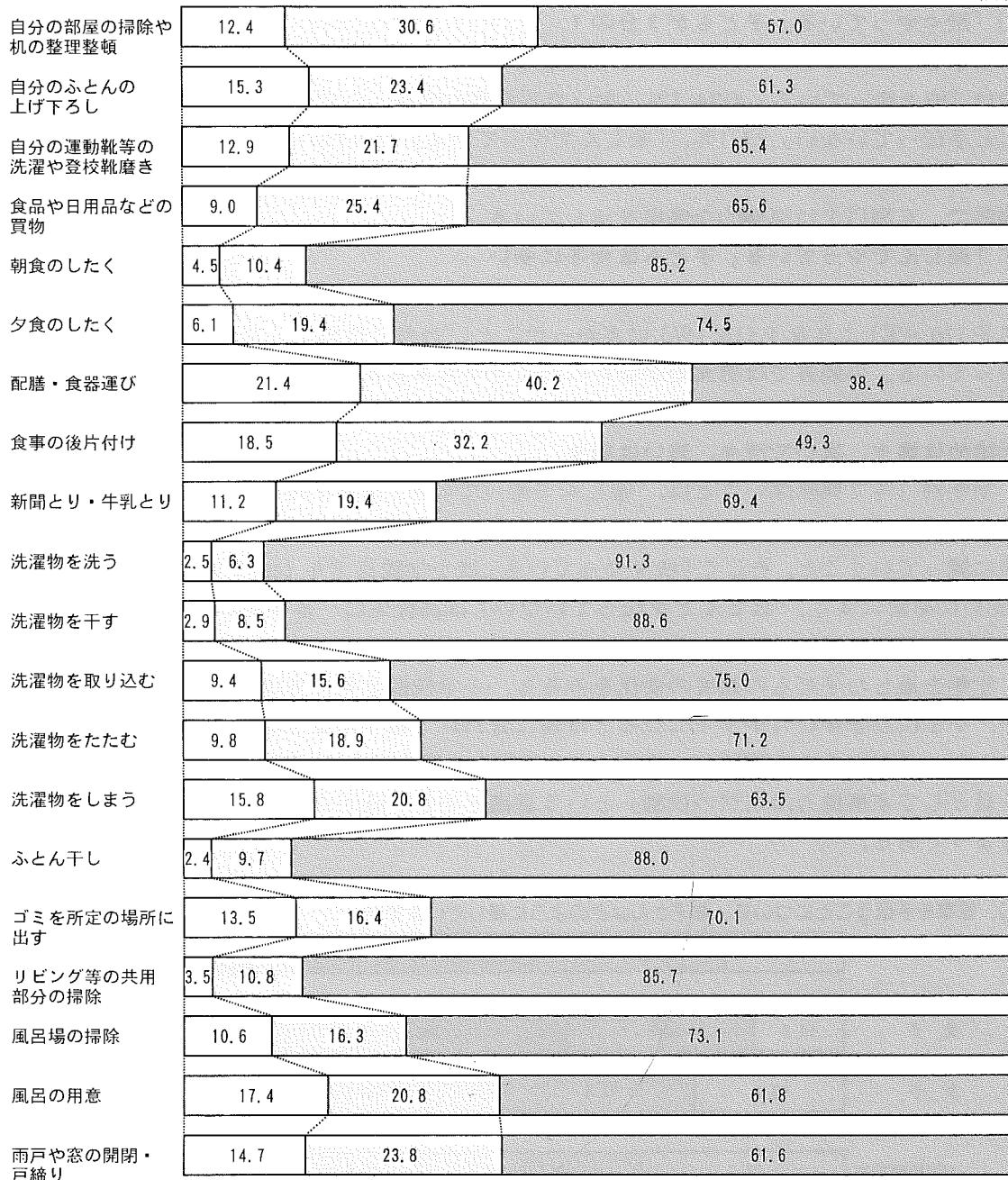
全般的に子どもが協力している家事はどの年齢でも同じように簡単な家事が多く、年齢による顕著な成長の跡はうかがえなかった。年齢とともに自分のことは自分でするという自立意識は少しは強まっていくようだが、家族の一員として分担すべきは分担するという自覚を持つには至らないようである。

●学年別にみた家事協力の状況（ヤル子の割合）



Q. お子さんは日常の家事をどの程度実施していますか。

(%)



ヤル子（非常によくやる+かなりよくやる）

マアマア子（まあまあやる）

ヤラナイ子（あまりやらない+全くやらない）

2. 子どもの家事協力の態度.....

(1) 「渋々やっている」子どもが3分の1

家事を手伝うことについて、子どもはどのように感じているのだろうか。最も多かったのは「渋々やっている」の34.1%。次いで「当然の役割としてやっている」23.3%、「ほとんど手伝っていない」23.1%、「楽しんでやっている」14.5%の順であった。「当然の役割としてやっている」「楽しんでやっている」など家事協力に積極的な態度を示す子どもは4割弱で、6割以上は消極的な態度を示している。

(2) 「楽しんでやっている」子どもは女子に多い

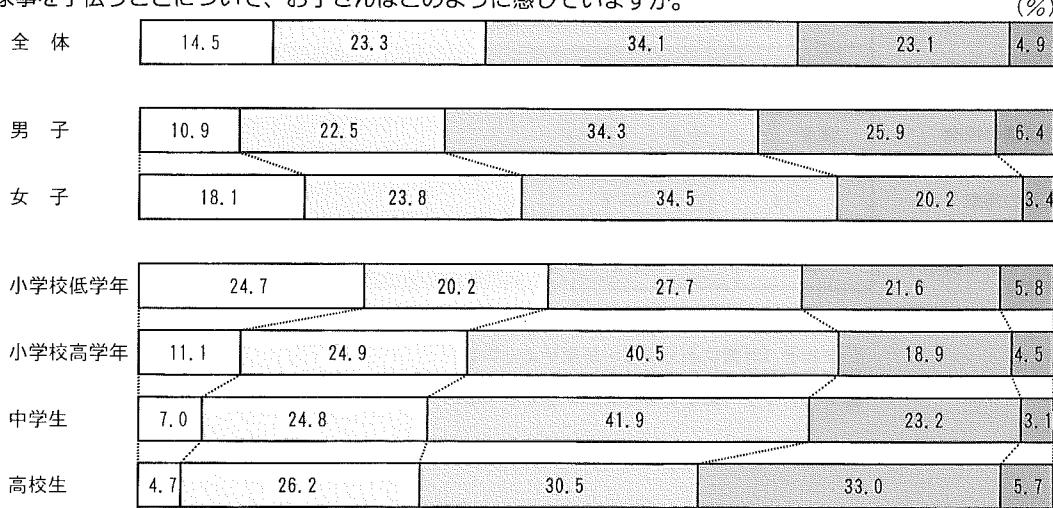
これを男女別にみると、大きな違いがみられたのは「楽しんでやっている」子どもが、男子(10.9%)より女子(18.1%)に多かったこと。「当然の役割としてやっている」や「渋々やっている」の回答では男女差がなかったことからみると、家事好きな子どもは女の子に多いようである。

(3) 始めは嬉々、次いで渋々、終いは嫌々

学年別にみて興味深いことは、「楽しんでやっている」は小学校低学年(24.7%)に多く、小学校高学年(11.1%)、中学生(7.0%)、高校生(4.7%)と学年が上がるにつれて次第に減っていくこと。そして「渋々やっている」は小学校高学年(40.5%)から中学生(41.9%)に非常に多く、「ほとんど手伝っていない」は高校生に一番多かった。一方、「当然の役割としてやっている」は各学年を通じて少しづつ増えていく傾向がみられた。

学年を通した子どもの態度の変化をみると、小学校低学年の時は楽しんでやる子も多いが、小学校高学年から中学生になると母親に言われて渋々やる子が増え、高校生になるとやらない子が多くなる様子がうかがえる。子どもの家事協力を促進するうえでは、「家族の一員として家事協力は当然の役割」という意識を小さい時から身につけさせることが肝心なようである。

Q. 家事を手伝うことについて、お子さんはどのように感じていますか。



□楽しんでやっている □当然の役割としてやっている □渋々やっている
■ほとんど手伝っていない ■手伝いは頼んでいない

3. 子どもの家の技量

(1)ボタンつけがデキル子は1割

子どもが家事に関わる初歩的な技能をどの程度できるか尋ねてみた。ボタンをつけることについては、よくできる子は全体では10.6%と1割程度。学年別にみると小学校低学年1.1%、小学校高学年9.8%、中学生19.0%、高校生24.7%と少しづつ増えている。ただし、高校生でもよくできる子とできない子が同数程度であり、学校で裁縫を教えてほしいという声が強いのもうなづける結果である。

(2)包丁を使える子は2割余

調理に欠かせない包丁を使うことについては、よくできる子が全体では24.0%。学年別にみると小学校低学年11.1%、小学校高学年22.4%、中学生37.3%、高校生39.9%と、ボタンつけに比べるとよくできる子が多く、学年ごとの進歩もみられるが、中学生以後の伸びがないのが残念な結果である。

(3)アイロンかけのできる子は6人に1人

アイロンかけについては、よくできる子は全体では15.5%。学年別にみると小学校低学年4.2%、小学校高学年14.0%、中学生23.1%、高校生35.1%で、学年ごとに順調にできる子が増えている。ただし、アイロンかけは男女差が大きく、全体ではできる子は女子の24.5%に対して男子は7.1%。おしゃれな男の子が増えたが、アイロンにまでは手が回らないようである。

(4)玉子を割ることがデキル子は7割弱

玉子を割ることについては、さすがによくできる子が全体でも68.2%と非常に多かった。しかし、中学生や高校生になっても「まあまあできる」と母親に評価される子どもが2割前後もいるのは、考えさせられる結果である。

Q. お子さんは家事に関わる次のことができますか。

●ボタンをつける

全 体	10.6	32.7	56.7
-----	------	------	------

●アイロンをかける

全 体	15.5	36.7	47.8
-----	------	------	------

小学校 低学年	7.8	91.2	
小学校 高学年	9.8	40.9	49.3
中学生	19.0	53.7	27.3
高校生	24.7	53.4	21.9

小学校 低学年	4.2	23.2	72.5
小学校 高学年	14.0	41.0	45.0
中学生	23.1	50.8	26.2
高校生	35.1	45.7	19.1

●包丁を使う

全 体	24.0	59.8	16.2
-----	------	------	------

●玉子を割る

全 体	68.2	28.0	3.8
-----	------	------	-----

小学校 低学年	11.1	60.7	28.2
小学校 高学年	22.4	66.7	10.9
中学生	37.3	55.6	7.6
高校生	39.9	54.1	6.0

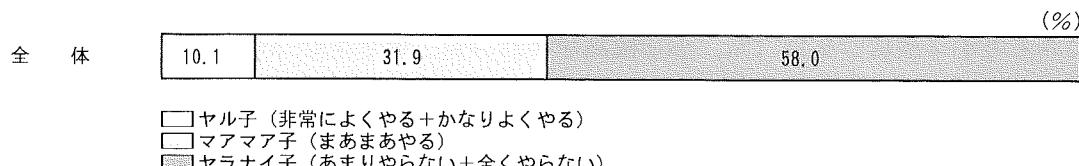
小学校 低学年	56.9	35.8	7.3
小学校 高学年	73.1	25.1	1.8
中学生	74.9	23.2	1.8
高校生	79.5	19.8	0.7

□よくできる □まあまあできる □できない

III. ヤル子の条件

家事全体を通してみた場合、子どもはどの程度家事に協力しているかを母親に評価してもらったところ、ヤル子は10.1%、マアマア子が31.9%、ヤラナイ子が58.0%を占めた。以下では、このヤル子、マアマア子、ヤラナイ子の割合が、子どもの属性、生活状況、性格・態度、家族の状況、母親の意識、家事教育の状況などによって、どのように変化するかを分析してみた。

Q. 家事全体を通してみると、お子さんはどの程度手伝っていますか。



1. 子どもの属性からみた相違.....

(1)兄弟姉妹の多いほどヤル子に育つ

回答者の家庭の子ども数をみると、「一人」が15.5%、「二人」が56.6%、「三人以上」が26.1%で、「二人っ子の家庭」が過半数を占めた。これらの子ども数別にヤル子の割合をみると、兄弟姉妹が「一人」の場合 7.0%、「二人」の場合 9.9%、「三人以上」の場合は11.2%であった。子ども数が多い家庭ほどヤル子が多く、子どもが増えてくると母親の手が回りにくくなるためか、ある程度子どもに家事を分担させる家庭が多いようだ。家事協力の面からみて、少子化社会は決してプラスとは言えないようである。

(2)長子より末子にヤル子が多い

兄弟姉妹間での関係をみると、ヤル子の割合は「第一子」 8.7%、「第二子」 12.0%、「第三子以上」 11.7%で、出生順位の遅い子にややヤル子が多くなっている。ヤラナイ子の割合をみるとこの傾向がより顕著で、ヤラナイ子は「第一子」 61.4%、「第二子」 54.2%、「第三子以上」 51.9%と出生順位の高くなるにつれて増えていた。

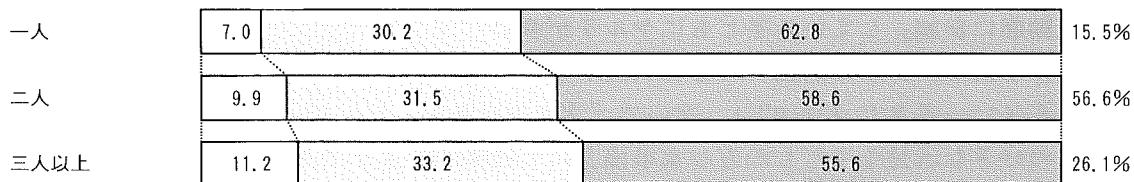
(3)ヤル子は男子より女子にやや多い

男女別にみると、ヤル子はやはり男子（7.3%）より女子（12.7%）にやや多かった。家事協力についての男女差は子どもの時からある程度認められるが、その差は大人の社会ほど大きいものではない。子どもの時から男の子よりも女の子に家事を教える家庭が多いことが反映しているようである。

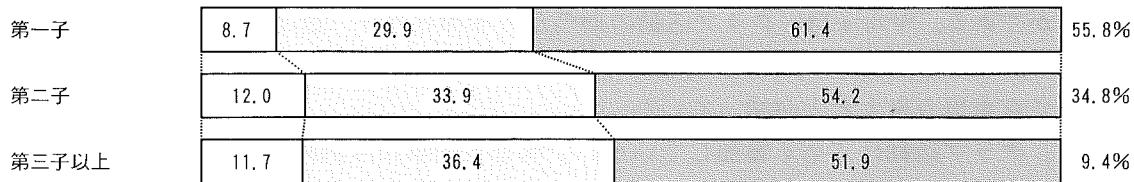
(4)年齢とともにヤル子とヤラナイ子に 2 極分化

学年別にみると、ヤル子は小学校低学年 7.7%、小学校高学年11.4%、中学生10.7%、高校生12.4%と、学年が上がるにつれてやや増えていく傾向もみられた。しかしヤラナイ子の場合も小学校高学年（52.8%）、中学生（57.8%）、高校生（61.5%）と、学年が上がるにつれて増えていく傾向がみられ、家庭環境によって年齢とともに自立型に育っていく子どもと、依存型になってしまう子どもの二極に分化していくようである。

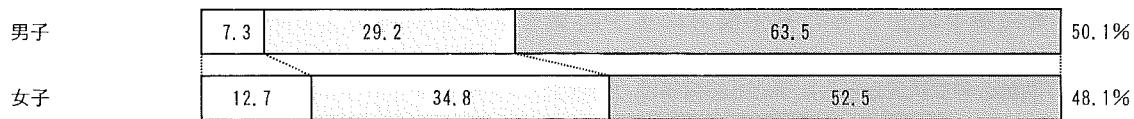
●子どもの数からみた子どもの家事協力の状況



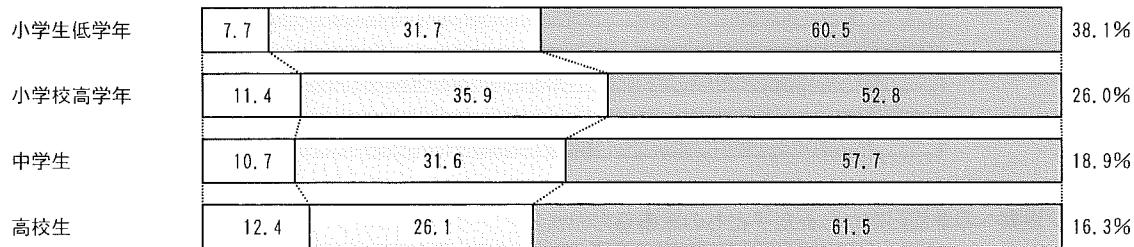
●出生順位からみた子どもの家事協力の状況



●男女別にみた子どもの家事協力の状況



●学年別にみた子どもの家事協力の状況



□ ヤル子 □ マアマア子 □ ヤラナイ子



2. 子どもの生活状況からみた相違.....

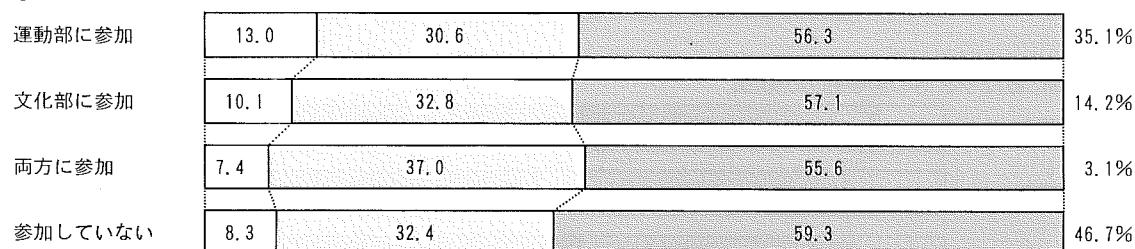
(1) 「運動部に参加」している子どもにヤル子が多い

地域や学校でのクラブ活動への参加状況からみると、意外にもヤル子は「運動部に参加」している子に一番多く（13.0%）、次いで「文化部に参加」（10.1%）だった。身体を動かすことの好きな活発な子どもの方が家事協力にも積極的なようである。

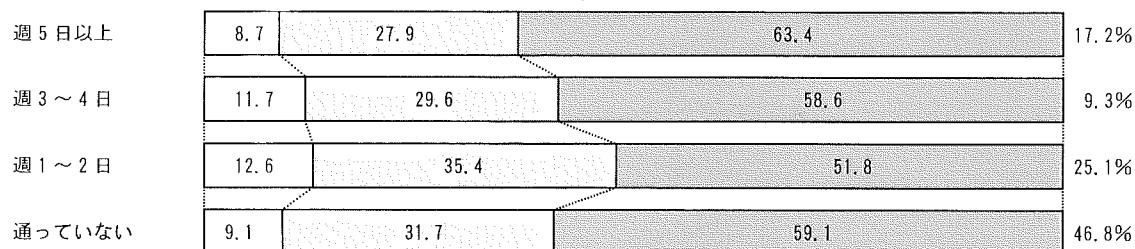
また「運動部と文化部の両方に参加」している子の場合はクラブ活動に忙しすぎるためかヤル子は7.4%と一番少なかった。このことは、クラブ活動の参加日数をみるとより一層明らかである。ヤル子は、クラブ活動の週当たり参加日数が「週5日以上」8.7%、「週3～4日」11.7%、「週1～2日」12.6%となっており、クラブ活動への参加日数が増えるにつれて家事協力をする子が減っていた。

一方、クラブ活動に「全く参加していない」場合も何事にも消極的なタイプが多いせいいか、あるいは塾通い等で忙しいせいか、ヤル子は8.3%と少なかった。実際に、塾やおけいこ事への参加状況からみると、ヤラナイ子は進学補習塾に通っている子が62.8%と一番多く、受験競争は子どもの家事協力に多少影響を与えているようである。

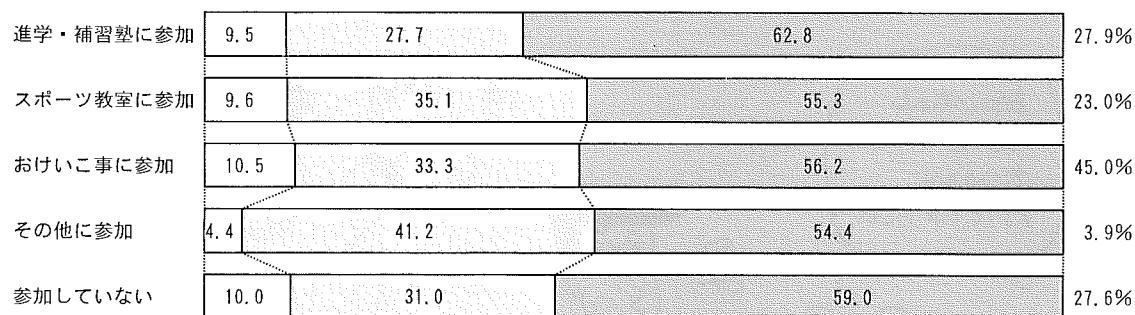
●クラブ活動の参加状況からみた子どもの家事協力の状況



●クラブ活動への参加日数からみた子どもの家事協力の状況



●塾やおけいこ事への参加状況からみた子どもの家事協力の状況



□ ヤル子 □ マアマア子 □ ヤラナイ子

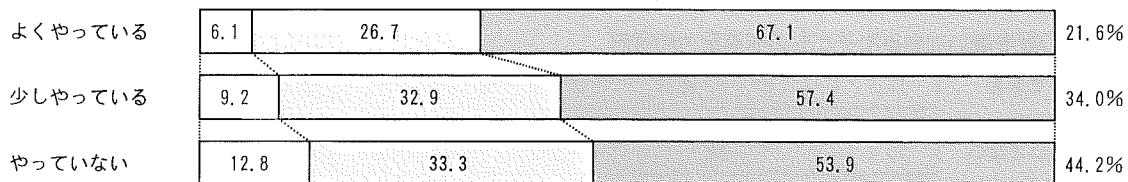
(2)ヤル子はテレビゲームはやらない、テレビはあまり見ない

家の中での過ごし方ではテレビとテレビゲームが大きなウエイトを占めるようになった。まずテレビゲームについてみると、ヤル子は「よくやっている」6.1%、「少しやっている」9.2%、「やっていない」12.8%と、テレビゲームをやる頻度が高くなるにつれて家事協力をする子が少なくなっている。家庭内でも遊びで夢中になってしまい、家事協力の時間が少ないという子も少なくないようである。

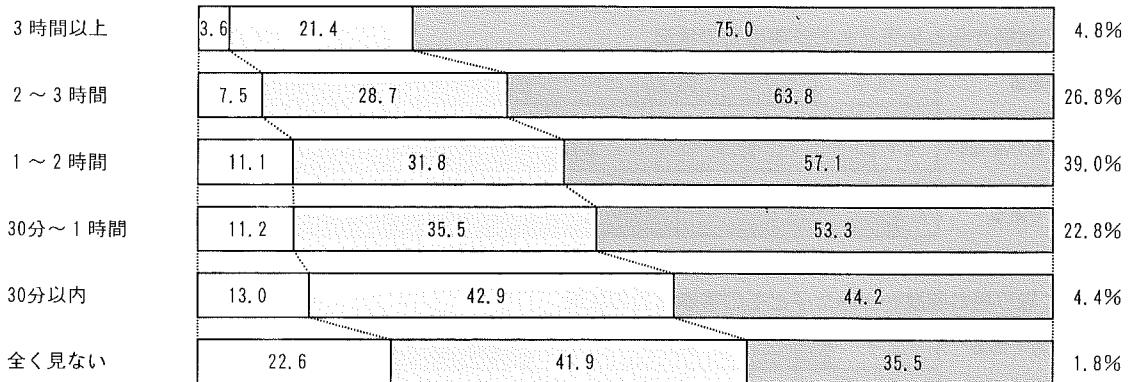
またテレビを見る時間についてみると、ヤル子はテレビの視聴時間が「30分以内」13.0%、「30分～1時間」11.2%、「1～2時間」11.1%、「2～3時間」7.5%、「3時間以上」3.6%と、テレビの視聴時間が長くなるほど家事協力をする子は減り、ヤラナイ子が増えている。テレビを「全く見ない」の回答はごく少数だったが、この場合にはヤル子が22.6%を占めていた。テレビの視聴時間は子どもの家事協力に与える影響が大きいが、これも家庭でのしつけのあり方と関わっているようである。

最近話題の子ども向け料理番組の視聴状況を尋ねたが、この結果をみると、「よく見る」子にはヤル子がかなり多く、子どもの家事協力を促す上でテレビの教育効果は小さくないようである。

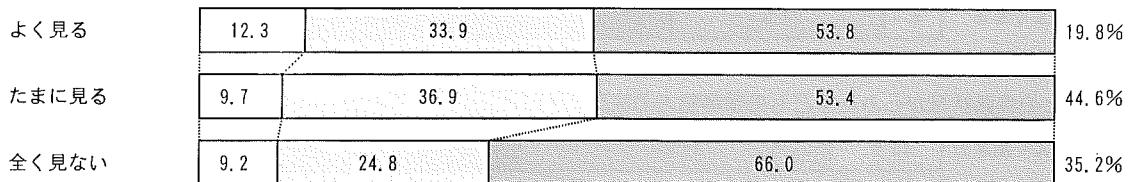
●テレビゲームの実施状況からみた子どもの家事協力の状況



●1日のテレビ視聴時間からみた子どもの家事協力の状況



●テレビの子ども向け料理番組の視聴状況からみた子どもの家事協力の状況



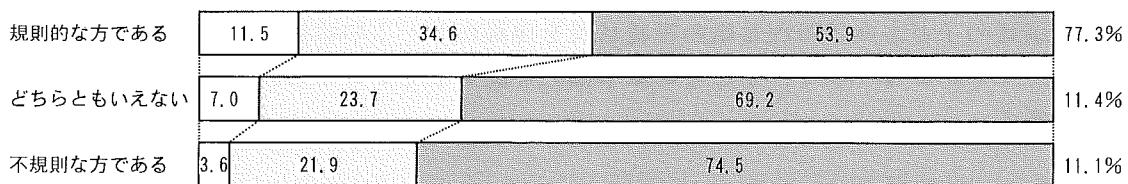
□ ヤル子 □ マアマア子 □ ヤラナイ子

3. 子どもの性格・態度からみた相違.....

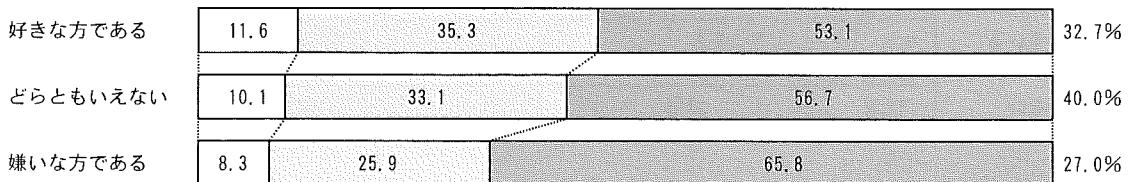
(1)ヤル子は意志の強いタイプに多い

子どもの性格や態度からみると、ヤル子は、①「意志が強い」14.2%、②「家族とよく話をする」13.0%、③「物事には積極的に取り組む」12.7%、④「勉強好き」11.6%、⑤「生活が規則的」11.5%の順に多かった。家事のように比較的単調な作業では、まず粘り強い性格を持っているかどうか、家族の一員としての日頃の親子の接触が十分行われているかどうか、などの影響が強いようである。また、これは単に家事を手伝うかどうかという問題だけではなく、日常生活のあらゆる面で家族の一員としてのコミュニケーションをうまく行いながら、子どもを自立的に育てているかどうかという、家庭教育全般のあり方と深く関わる結果ではないかと思われる。

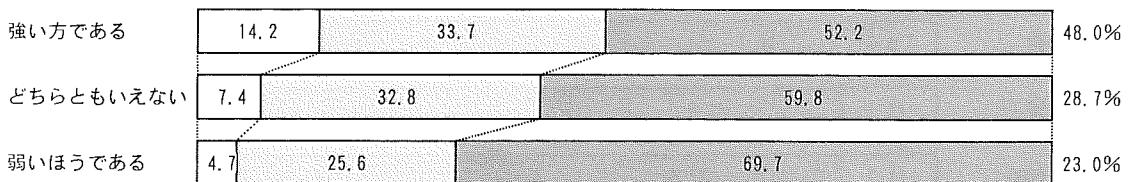
●生活の規則性からみた子どもの家事協力の状況



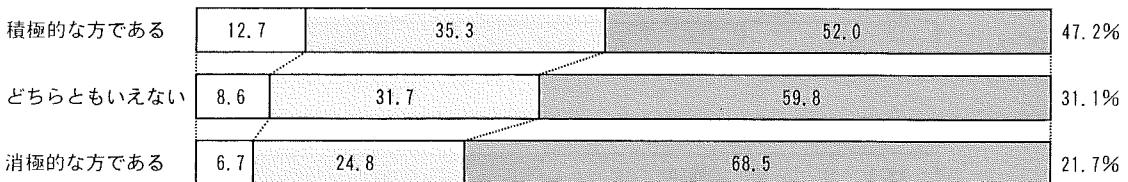
●勉強の好き嫌いからみた子どもの家事協力の状況



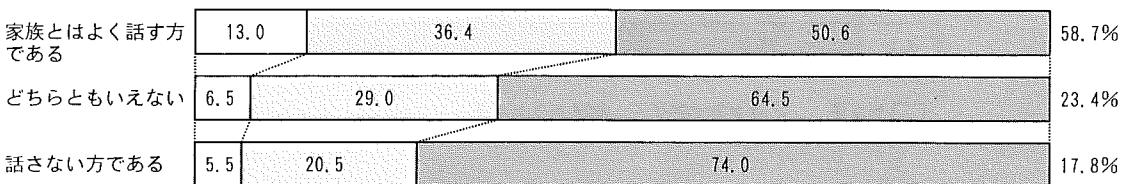
●意志の強弱からみた子どもの家事協力の状況



●物事に取り組む態度からみた子どもの家事協力の状況



●家族との会話状況からみた子どもの家事協力の状況



□ ヤル子 □ マアマア子 □ ヤラナイ子

4. 母親の就労状況や就労意識からみた相違.....

(1)母親の世代による違いはない

母親の年齢別にみると、ヤル子は母親が「20代以下」10.0%、「30代」9.9%、「40代」10.5%、「50代以上」10.5%で、母親の世代により子どもの家事協力の状況にはほとんど違いがみられなかった。

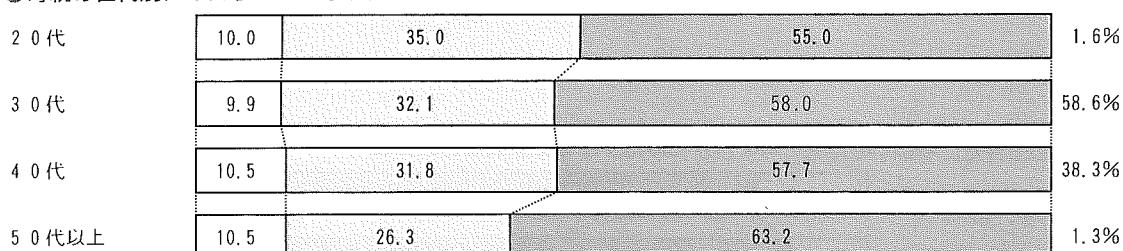
(2)ヤル子は専業主婦の家庭にやや多い

母親の就労別にみると、ヤル子は母親が「フルタイム就労」の場合10.3%、「パートタイム就労」の場合7.1%、「専業主婦」の場合12.7%であった。母親が専業主婦の場合にヤル子が最も多いのは、家庭で子どもの世話をしながら家事を手伝わせる母親が多いためであろう。逆にパートタイムの場合は、家事を自分で担当するためにパートタイムを選んだ母親が多いためか、ヤル子が一番少なかった。

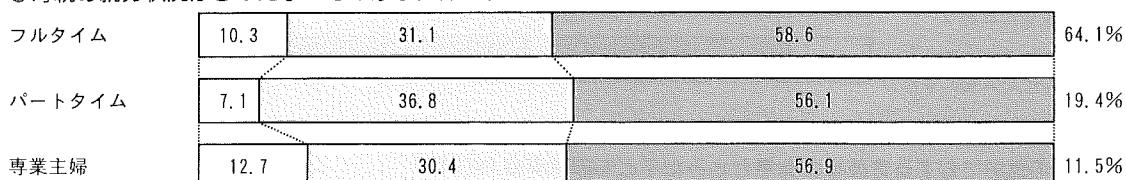
(3)母親が有職の場合は勤務時間が長くてもヤル子が多い

有職の母親を勤務時間別にみると、ヤル子は母親の週勤務時間が「35時間未満」の場合は7.5%、「35～45時間未満」の場合は11.0%、「45～55時間未満」の場合は10.1%、「55時間以上」の場合は12.5%だった。勤務時間が短いからといってヤル子が多いとは限らず、最も長い場合にヤル子が多いという結果がみられた。

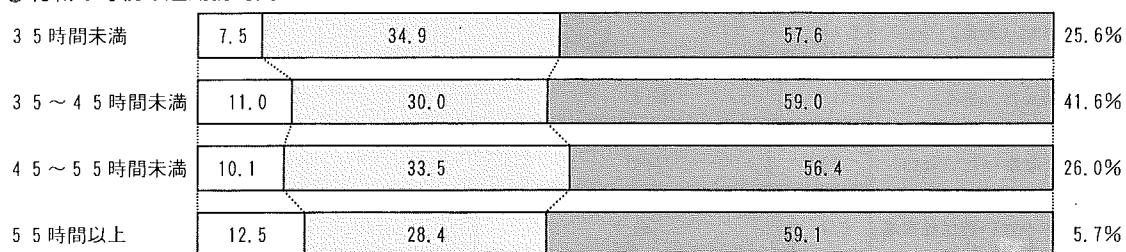
●母親の世代別にみた子どもの家事協力の状況



●母親の就労状況からみた子どもの家事協力の状況



●有職の母親の週勤務時間からみた子どもの家事協力の状況



□ ヤル子 □ マアマア子 □ ヤラナイ子

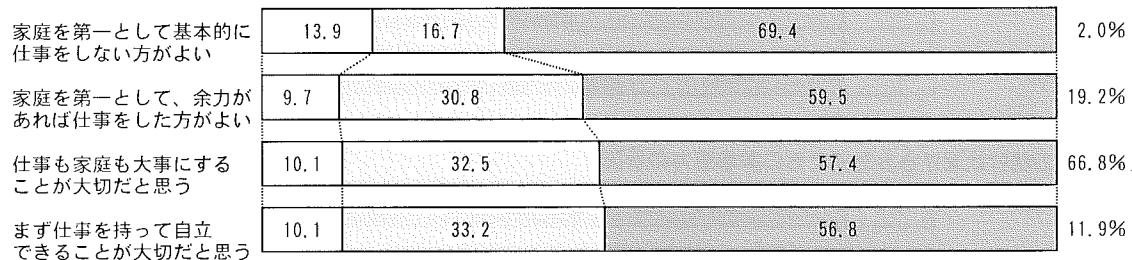
(4)母親の人生観の違いはプラスにもマイナスにも働く

女性の生き方に対する母親の意識からみると、回答者は少数だが「女性は家庭を第一として、基本的に仕事をしない方がよい」と答えた場合はヤル子が13.9%と一番多かった。この点から言えば、母親が家庭最優先派であれば、子どもも家庭を大切に考えるとみることができる。しかし、ヤラナイ子をみると、家庭最優先派の場合は69.4%と最も多く、次いで「余力があれば仕事をした方がよい」59.5%、「仕事も家庭も大事にすることが大切」57.4%、「仕事をもって自立できることが大切」56.8%と続いており、仕事優先派の方がヤラナイ子が少なかった。つまり、母親が家庭優先派の場合はその気になれば子どもをヤル子に育てるチャンスも多いが、自分で家事を一手に引き受けてしまえばヤラナイ子に育ててしまうことになり、一方、母親が仕事優先派の場合は子どもに家事をしつけるチャンスが少ないが、子どもの方で家事を手伝わなければという気持ちを起こす消極的な動機を与えているのではないかと思われる。

(5)就労に引け目を感じる母親だとマイナス

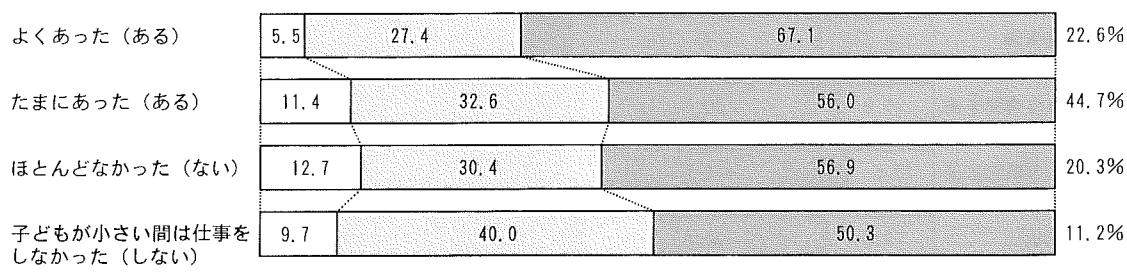
子どもが小学校低学年以下の時に母親が就労していた場合に、子どもに対して後ろめたい、気の毒といった気持ちを持ったかどうかを尋ねてみた。その結果を通してみると、「よくあった」と答えた母親の場合はヤル子が5.5%、「たまにあった」は11.4%、「ほとんどなかった」は12.7%だった。母親が仕事を続けることで子どもに引け目を感じているような場合はヤル子が少なく、子どもに積極的に家事協力を促しにくい気持ちになるようである。

●女性の生き方についての母親の考え方からみた子どもの家事協力の状況



●母親の就労に対する気兼ねの有無からみた子どもの家事協力の状況

(子どもが小学校低学年の時に仕事をしていて、後ろめたい、子どもが気の毒といった気持ちを持ったことがありますか)



□ヤル子 □マアマア子 □ヤラナイ子

5. 家事の実施状況からみた相違.....

(1)家事好きな母親だとヤル子に育つ

母親の家事に対する考え方からみると、ヤル子は母親が家事が「好きな」場合は14.4%、「あまり好きでない」場合は7.6%。母親が家事を好んでやるタイプだと子どもにもその気持ちが伝わるようで、家事協力に積極的な子が増えている。

(2)家事に計画性がある母親だとヤル子が増える

家事の実施方法からみると、母親が「基本的に計画を立ててやる」場合はヤル子が13.7%、「その都度、その場主義でなんとかやっている」場合は8.0%。やはり家のやり方も場当たり主義で計画性がないと、子どもの家事協力は期待しにくいようである。

(3)夫の家事分担が高い家庭ほどヤル子が多い

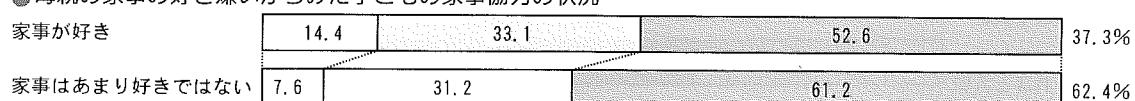
夫の家事分担の状況からみると、ヤル子は夫の家事分担が全くない場合は6.7%、1割程度の場合は9.3%、2～3割程度の場合は11.0%、4割以上分担の場合は16.0%であり、夫が家事をよく分担するほどヤル子も多かった。

(4)親世帯への依存はマイナス

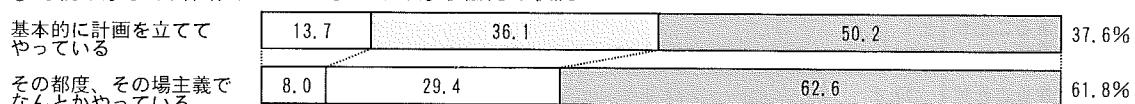
親世帯との同居関係からみると、ヤル子は別居の場合が11.0%と最も多く、次いで夫側の祖父母との同居の場合8.5%、妻側の祖父母との同居の場合6.5%だった。別居に比べて同居の場合は家事協力をする子どもが少ないようである。

また、親世帯との家事の関係からみると、「たまに手伝ってもらっている」(11.0%)「ほとんど手伝ってもらっていない」(11.3%)に比べて、日常的に家事を手伝ってもらっている場合はヤル子は6.6%と少ない。同居・別居に関わらず、親世帯への依存度が高くなると、子どもの家事協力にもよい影響は与えないようである。

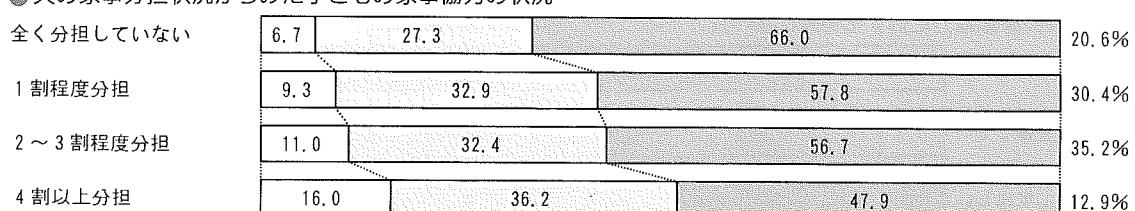
●母親の家事の好き嫌いからみた子どもの家事協力の状況



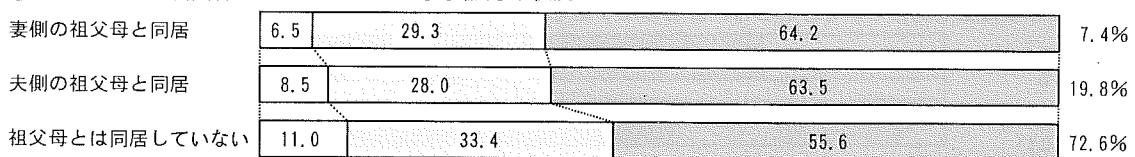
●母親の家事の計画性からみた子どもの家事協力の状況



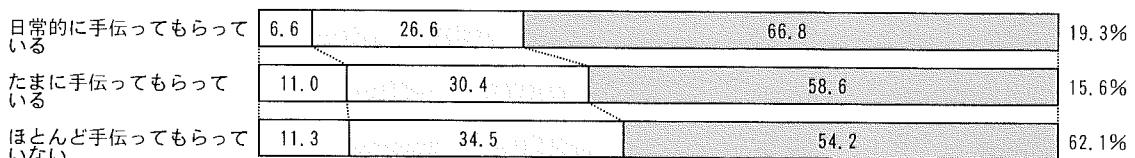
●夫の家事分担状況からみた子どもの家事協力の状況



●親世帯との同居関係からみた子どもの家事協力の状況



●親世帯からの家事支援関係からみた子どもの家事協力の状況



□ヤル子 □ママア子 ■ヤラナイ子

6. 家事教育の状況からみた相違……………

(1)家事に対する母親の認識が大切

人生における家事の意義をどう評価するかの回答からみると、母親が「家事ができることは人間にとて大切」と考える場合はヤル子が10.5%で、「家事ができる・できないはそれほど大切なことではない」と考える場合は 6.6%と少なかった。特に後者の場合はヤラナイ子が71.1%を占めており、お母さんが家事はできなくてもよいと考えているとヤラナイ子に育つケースが多いことがわかる。

(2)家事より勉強優先の母親だとヤル子に育ちにくく

家事と勉強との優先度からみると、子どもは「勉強ができる方が大切」と考える場合はヤル子は 6.7%。「家事ができることが大切」と考える場合の13.8%よりかなり少ない。母親が勉強優先の姿勢でいるとなかなかヤル子には育ちにくくことがわかる。

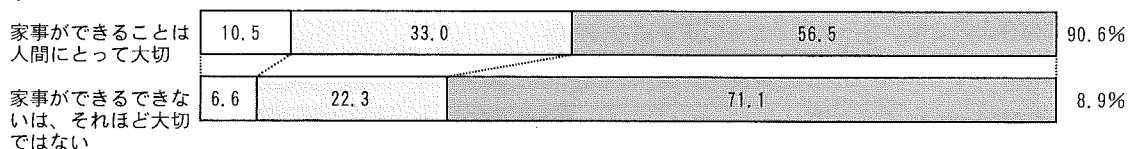
(3)きちんと分担を求めればヤル子が多い

子どもの家事協力への要望からみると、「きちんと家事を分担してほしい」と考える場合はヤル子が16.5%、「ある程度分担してほしい」の場合は 7.5%であった。母親が子どもの分担をきちんと求めれば、ヤル子に育つ可能性が高いことが示されている。

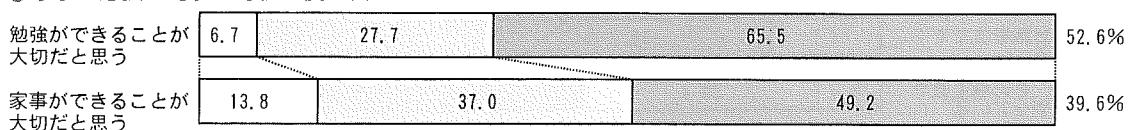
(4)家事当番を決めるることは大切なポイント

実際に家事分担を決めているかどうかをみると、「分担（当番）を決めている」場合はヤル子が21.2%、「決めていない」場合は 5.4%だった。子どもの家事協力を促すためには、家族間できちんと分担を決めることが非常に大事なことがわかる。

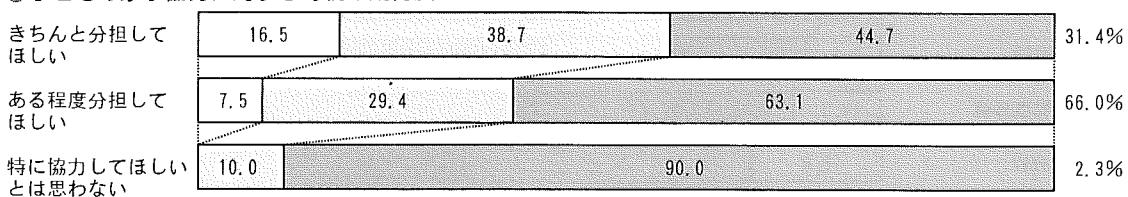
●家事に対する母親の認識からみた子どもの家事協力の状況



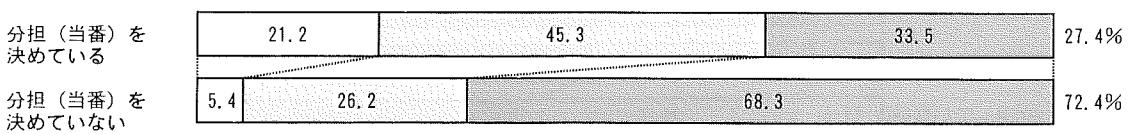
●家事と勉強に対する母親の優先度からみた子どもの家事協力の状況



●子どもの家事協力に対する母親の期待度からみた子どもの家事協力の状況



●家庭で家事分担を決めているかどうか、からみた子どもの家事協力の状況



□ ヤル子 □ マアマア子 □ ヤラナイ子

(5)きちんと教えればヤル子に育つ

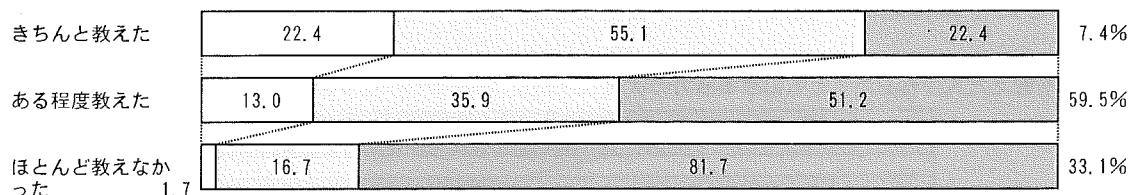
家事教育の実施状況からみると、男の子に対して「きちんと教えた」場合はヤル子が22.4%、「ある程度教えた」場合も13.0%であり、「教えなかった」場合の1.7%に比べてヤル子が非常に多かった。女の子の場合も「きちんと教えた」場合はヤル子が26.9%、「ある程度教えた」場合は10.8%で、「教えなかった」場合の0.4%より多い。きちんと家事を教えれば子どもも協力するようになることがわかる。

(6)家事教育は先手必勝、中学生からでは何の効果もない

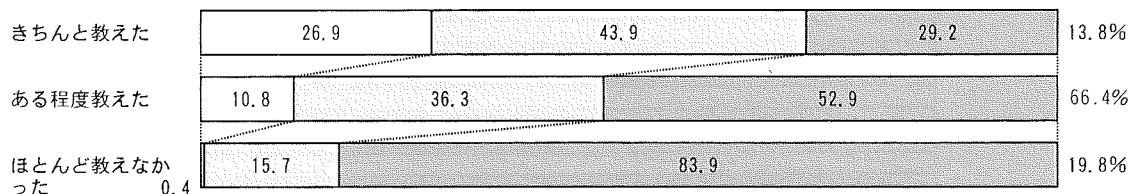
家事を教えた時期からみると、「小学校入学以前から」の場合はヤル子が15.7%、「小学校低学年から」の場合は7.0%、「小学校高学年から」の場合は8.6%、「中学生になってから」の場合は0.0%。家事教育は早いほど効果が高く、中学生になってからではすでに手遅れであることがわかる。

●家事教育の実施状況からみた子どもの家事協力の状況

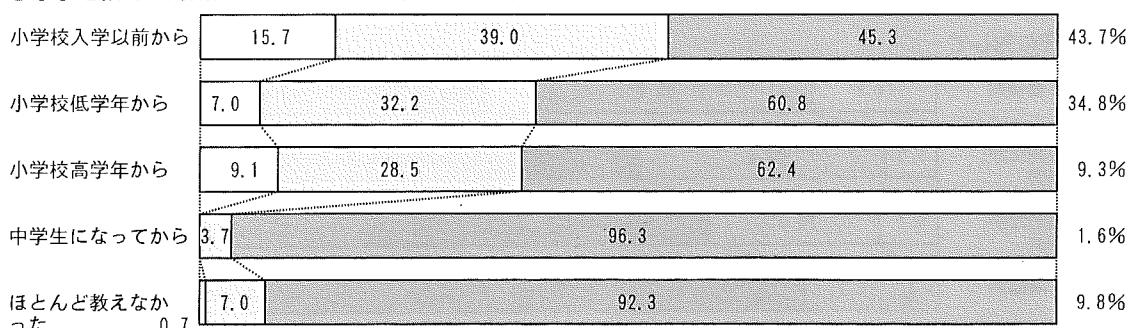
●男の子に対して



●女の子に対して



●家事を教えた時期からみた子どもの家事協力の状況



□ ヤル子 □ マアマア子 □ ヤラナイ子

(7)家事教育の効果は父親の参加がポイント

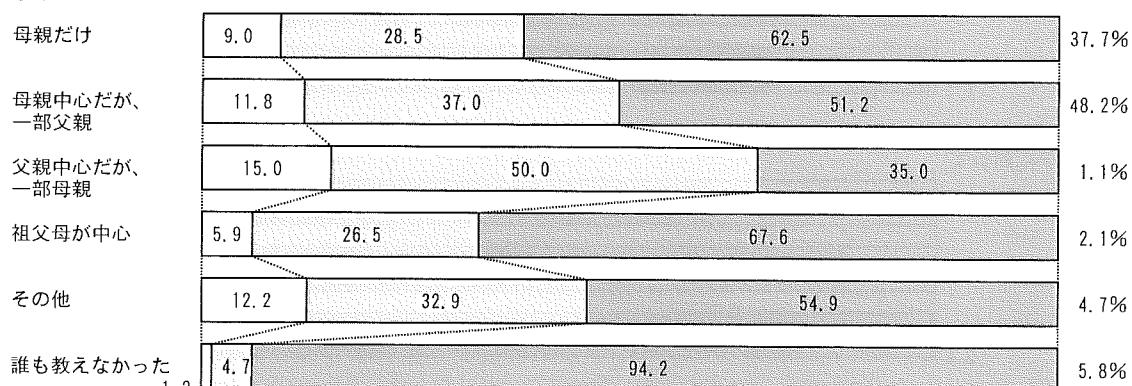
家事を教えた人からみると、ヤル子の割合は回答者は少数だが、「父親中心だが、一部母親」の場合が一番多く15.0%、次いで「母親中心だが、一部父親」11.8%、「母親だけ」9.0%、「祖父母が中心」5.9%と続いた。家事教育の効果をあげるためにには、何より父親の参加が決め手となっていることがわかる。

また、子どもの教育についての関与状況からみても、ヤル子は「夫婦で半々位」でタッチしている場合に12.8%と最も多かった。一方、「父親中心」の場合は子どもを遊び中心で育ててしまうせいか 3.3%と最も少なかった。夫婦の家事・育児の分担のバランスが子どもの家事協力のポイントといえそうである。

(8)夫婦の一方が張り切っても効果はない

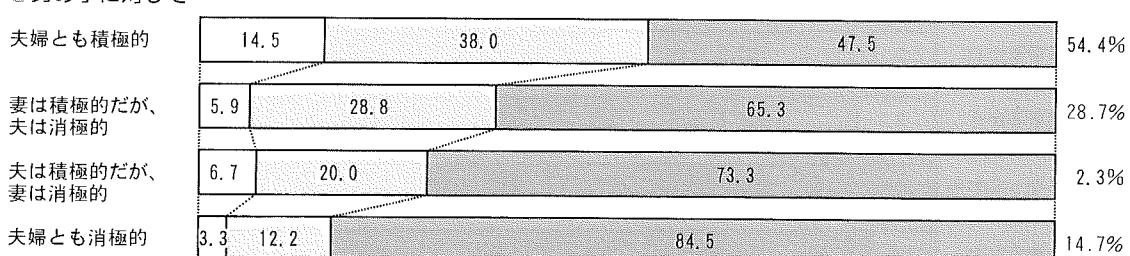
実際に家事をさせることに対する夫婦間の意見からみると、男の子に対して「夫婦とも積極的」な場合はヤル子が14.5%とかなり多いが、「妻は積極的だが、夫は消極的」 5.9%、「夫は積極的だが、妻は消極的」 6.7%と、夫婦の一方が消極的な場合はいずれもヤル子が少なかった。女の子についても全く同じような結果であり、夫婦の一方が張り切るだけではほとんど教育効果が期待できないことがわかる。

●家事を教えた人からみた子どもの家事協力の状況

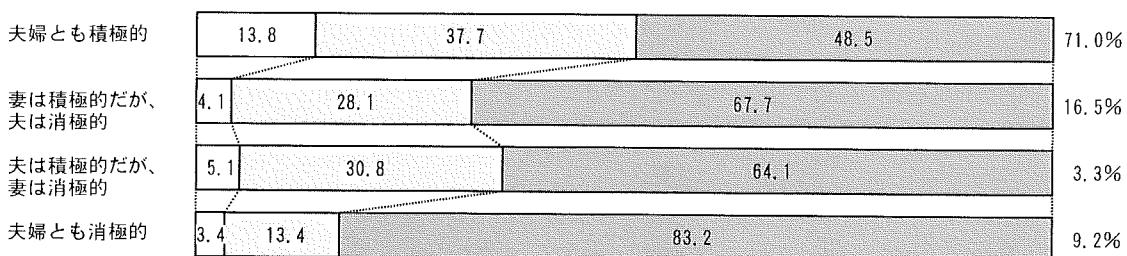


●家事をさせることに対する夫婦の意見からみた子どもの家事協力の状況

●男の子に対して



●女の子に対して



□ ヤル子 □ マアマア子 □ ヤラナイ子

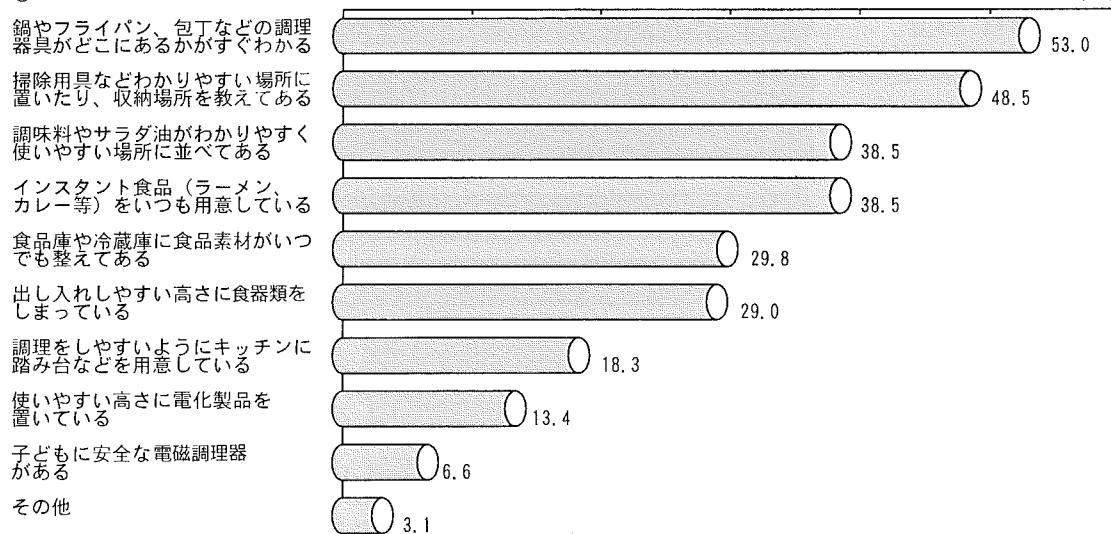
7. 住まいや住まい方の工夫からみた相違.....

子どもの家事協力を促すため家庭で実施している工夫を尋ねたところ、上位に挙げられたものは、①「鍋やフライパン、包丁などの調理器具がどこにあるかすぐわかる」53.0%、②「掃除用具などをわかりやすい場所に置いたり、収納場所を教えてある」48.5%、③「調味料やサラダ油がわかりやすく、使いやすい場所に並べてある」38.5%、④「インスタント食品をいつも用意している」38.5%、⑤「食品庫や冷蔵庫に食品素材がいつでも整えてある」29.8%だった。工夫点としては、調理や掃除に関わる道具を子どもにわかりやすい場所に置き、置き場所を教えている家庭がかなり多い。

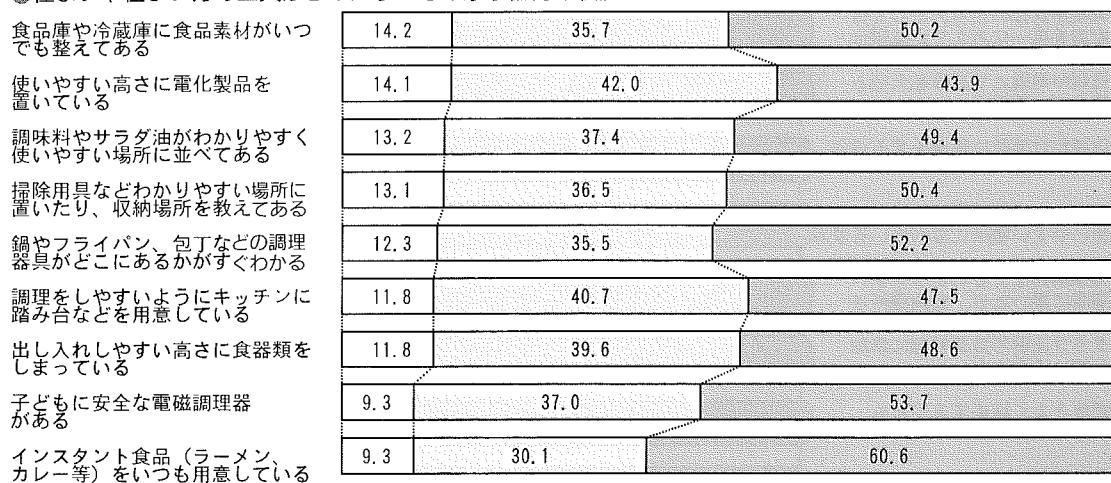
これらの工夫がヤル子とヤラナイ子の割合にどんな変化を与えているかみると、ヤル子が多いのは、①「食品庫や冷蔵庫に食品素材がいつでも整えてある」14.2%、②「使いやすい高さに電化製品を置いている」14.1%、③「調味料やサラダ油がわかりやすく、使いやすい場所に並べてある」13.2%だった。素材や道具を整えておき、しかも子どもでも使いやすい場所に置くことが効果的な工夫点であることがわかる。

またヤラナイ子の少ない項目をみると、①「使いやすい高さに電化製品を置いている」43.9%、②「調理しやすいようにキッチンに踏み台などを用意している」47.5%、③「出し入れしやすい高さに食器類をしまっている」48.6%が上位にきており、わかりやすい場所に置き、置き場所を教えるというだけではなく、子どもでも使えるような高さの工夫も大切なポイントとなっていることがわかる。

●家事協力を促すための住まいや住まい方の工夫（いくつでも） (%)



●住まいや住まい方の工夫からみた子どもの家事協力の状況



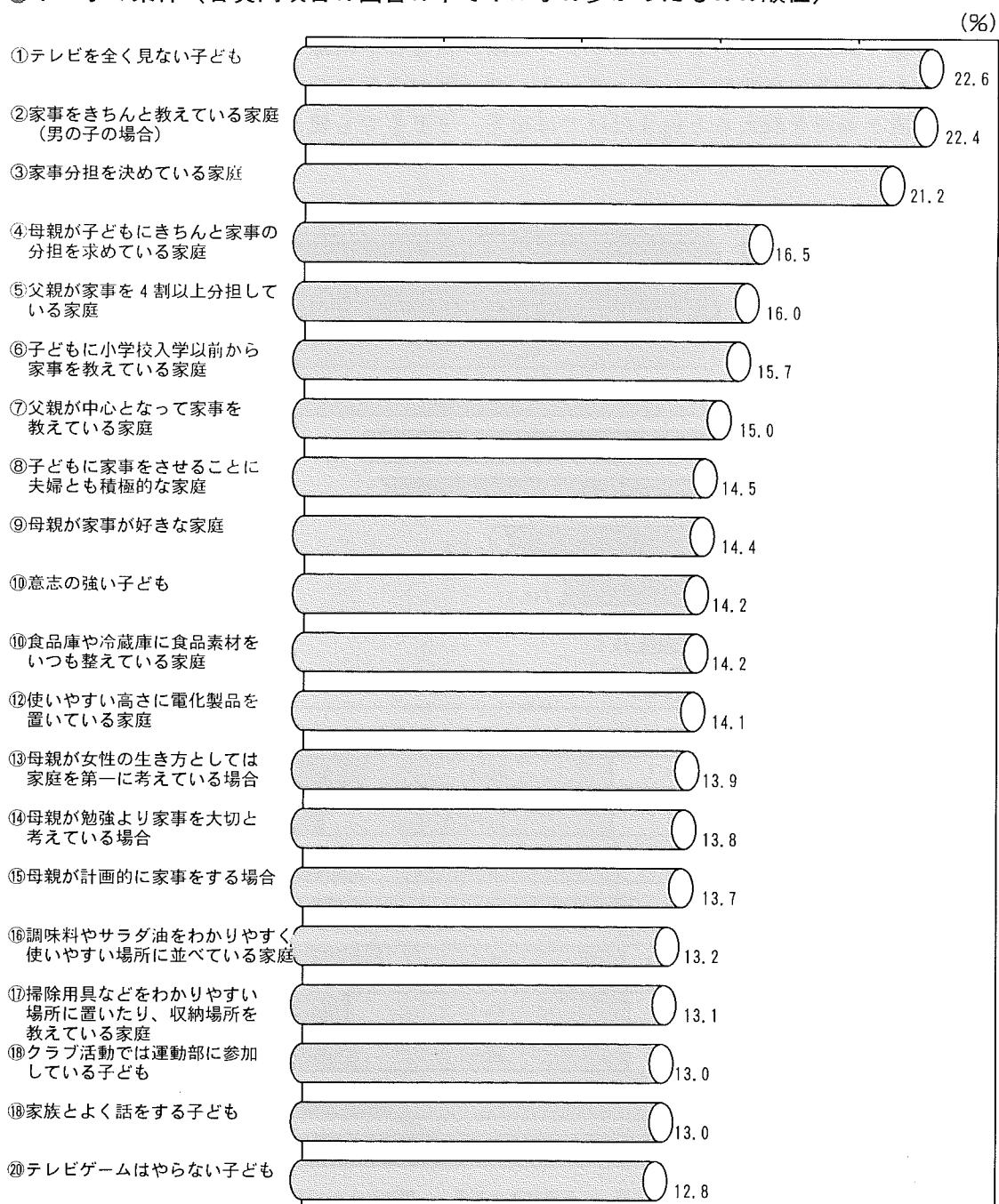
□ ヤル子 □ マアマア子 □ ヤラナイ子

8. ヤル子の条件まとめ

ここまで分析した子どもの属性・生活状況・性格・態度、母親の就労状況・就労意識、家事の実施状況、家事教育の状況、さらに住まいや住まい方の工夫など、子どもと子どもを囲む家庭環境の中で、ヤル子の多い条件をまとめてみると、①子どもにテレビを見せない、②きちんと家事を教える、③家事当番を決める、④夫が家事に参加する、⑤子どもにもきちんと分担を求める、⑥家事教育は小学校入学以前から始める、⑦家事教育には父親も参加するなどが挙げられる。

この結果からみると、ヤル子に育つ条件は、まず小学校入学以前の早い段階から子どもに家事を教えて、そして当番を決めて分担させること、しかも母親だけではなく夫婦が共同でこの役割を担うことが非常に大切なポイントであることがわかる。逆に言えば、家事をきちんと教えて分担させている家庭が少ないことが、ヤル子が少ないという現状を生み出しているのではないかと考えられる。

●ヤル子の条件（各質問項目の回答の中でヤル子の多かったものの順位）



母親からみた子どもの家事協力
調査結果報告

平成 6 年 3 月 25 日 発行
発行 旭化成工業株式会社 共働き家族研究所
〒160 東京都新宿区西新宿 1-21 (明宝ビル)
電話 03-3344-7096
※転載する場合はあらかじめご連絡願います。

